

『貧者の息子』の語り (1)

—— 物語における現在形の多様な効果 ——

青 柳 悦 子

- I. はじめに
- II. 予備的考察
 1. 小説における過去形と現在形の併用
 2. フランス語の現在形の機能について
- III. 『貧者の息子』の語りにおける現在形
 1. 語り手表出の現在形 [A]
 - 1) 語り手の存在と物語行為そのものの強調
 - 2) 過去と現在、物語内容と物語行為との接続
 - 3) 不可知の強調
 2. 一般的真理の現在形 [B]
 - 1) 格言的な一般論の頻出
 - 2) ローカルな物語内容から普遍的な人間論へ
 - 3) onの活用 —— 場面をもとにした一般論の提示
 - 4) 真理の反転 —— フェラウンの相対主義
 3. 物語叙述の現在形 [C]
 - 1) 眼前描写の機能の拡張と語り手の位相
 - 2) 揺動的な叙述態勢 —— 一貫した叙述態勢をとるスイヌ版との比較
 - 3) 現在形の物語叙述への移行
 - a. 語り手の表出を契機として
 - b. 登場人物の主観性や知覚を契機として
 - c. 自由話法との接続
- IV. おわりに

I. はじめに

『貧者の息子——カビリーの教師メンラド』(*Le Fils du pauvre, Menrad, instituteur kabyle*, 1950)¹は、フランスの植民地時代、アルジェリアのカビリー地方に生まれた作家ムルド・フェラウン Mouloud Feraoun (1913–1962) の処女作にして代表作である。フェラウンの母語は通常書かれることのないカビリー語であり、7歳から受けた公教育のなかで培ったフランス語がフェラウンの駆使しえる唯一の書記言語であった。そのフェラウンがフランス語で書いた

小説が『貧者の息子』である。

フランス語を母語とするのではない作者の作品については、そこに見られる規範から逸脱した特徴が作者の言語的な未熟さにただちに還元されてしまがちであった。しかし現在は、一般に多言語使用による生き方が劣ったあるいは例外的なものとはみなされなくなり、文学においてもバイリンガル作家が数多く誕生してその作品が高く評価されることも稀でなくなってきた。今日、フェラウンの小説についても、作品に見られる言語的な特徴をそれ自体意味をもつものとして検討し、そのメカニズムや効果について検討することが、ごく自然な文学研究の行為として可能となり、また必要とされていると考えられる。

フランス語の物語叙述には一定の慣習があるが、『貧者の息子』の物語叙述はそれをさまざまな点で破るスタイルをとっている。物語の叙述法というのは、それぞれの文化圏・言語圏において暗黙の一般基準として醸成されているもので、むしろ明文化されているものではないし、文法規則とは異なってそれに対する違反・逸脱も明確に誤謬であるとは言い難いものである。それゆえ許容範囲であれば新たな文体として受け容れられ、文学表現の地平を広げていくのである。

本研究では2回に分けて、これまで真剣に検討されることのなかった『貧者の息子』の語りの特徴について詳細に分析することで、この作品の試みを明らかにするとともに、フランス語による物語叙述のメカニズムを確認しながらその発展の可能性を探ることを目的とする。その第1回である本稿においては、この作品における多彩な現在形の使用法について精査し、その効果について探究をおこなうことを課題とする。次回に予定している論文では、現在形の使用と結びついた形でこの作品に頻出する自由間接話法・自由直接話法の詳細な分析、それを踏まえた現在形の多様な機能の融合的な使用例についての検討、そして物語行為の時間的持続についてのこの作家独特のヴィジョンとそれを反映したこの作品の特徴についての議論をおこなうこととしたい。

II. 予備的考察

1. 小説における過去形と現在形の併用

『貧者の息子』の語りの特徴として読み手の誰もがまず気づくのは、物語叙述に現在形が多用されていることであろう。なお本稿では小説等の物語テキストのなかで、物語世界内の出来事や状況を記述する部分に関して「物語叙述」

という用語を当て、語り手自身のコメント（日本の古典文学で「草子地」と言われる部分に相当する）との区別をおこなうこととする。

物語というものは、世界のどこでも、過去形の動詞を用いて提示されるのが一般的である。その過去形の物語叙述のなかで、一時的に現在形を用いた叙述へのシフトが起きる現象はさまざまな言語の文学テキストや新聞等での報道記事で見受けられ、容認されている。シフトが起きるにあたっての条件や現在形叙述部分の長さについては、言語ごとに、あるいは文化圏ごとに差異が見られる。たとえば英語よりもフランス語の方が物語叙述に現在形を用いることに対して「寛容」であることはさまざまな研究において明示されている²。また日本語では、物語叙述における現在形の使用はさらに高い頻度で観察される。むしろ過去形（「タ型」）と現在形（「ル型」）を交替させながら叙述する方が自然な語り方という印象をもたらすほどである³。もちろん過去形を一貫して用いて小説作品を書くことは日本語でも可能であるし、それは文体上の選択に類する事柄と言うべきである。ただし日本語の場合は過去形のみで物語を語り続けると、昔話か報告を旨とした平板な文章であるという感じがすることだろう。なおこうした言語間の慣習の違いから、夏目漱石や安部公房あるいは川上弘美などの作品を原文と英語訳・フランス語訳で比べてみると、多くの場合、現在形の部分が過去形にそろえられる傾向にあることがわかる⁴。

一方、英語やフランス語でも、文学的な探究の結果であるのか、おそらくより伝統的・常識的な規範を脱した自由なスタイルとして、物語叙述に現在形を用いる傾向が広がっているように思われる。枚挙にいとまがないが、物語叙述において現在形を使用することへの制限が大きい英語に関して見渡してみても、たとえば人気作家でもあるポール・オースターの作品にはしばしばそれが見られる⁵。米国生まれのインド系作家のジュンパ・ラヒリの代表作『その名にちなんで』⁶は回想を内容としているにもかかわらず、ほとんど全面的に現在形を使用した作品である。こうした作品の増加とともに読者の許容度が増し、過去形と現在形の両方を用いた叙述の効果に対する意識が洗練されるとともに、自分たちの慣習とはすこし違った物語文体を受け容れること自体に関心もたれるようになってきたようである。おそらくこうした傾向の表れとして、たとえば日本文学を欧米の言語に翻訳する際に、最近の新訳では、過去形と現在形のあいだの動詞時制の揺れを反映させた訳し方が見られるケースも目立ってきた⁷。

またここで指摘しておきたいのは、動詞の機能と動詞体系の編成が完了・未

完了のアスペクトを中心にして、あるいはこのアスペクトを重視したかたちで成されている言語における物語叙述では、かなり広範に完了形（過去形）と完了形（現在形）を組み合わせる現象が見られることである。すなわち、ローマン・ヤーコブソンがロシア語を例として関心を向けた⁸「相対時制」を原理として有する言語は世界を見渡せば多くあり、最も典型的なアラビア語⁹のほか、ロシア語などスラブ諸語¹⁰、チベット語¹¹などがまず挙げられる。いわゆる「時制の一致」¹²をおこなわない日本語もこれに類し、過去形（「タ型」）と現在形（「ル型」）を織り交ぜた物語叙述が好まれることは上にも触れたとおりである。韓国語でもこうした例はよく見られるとのことである。逆に言えば、小説において語りの時点を固定した一点に定め、テキスト全体をこの同一の語りのポジションから過去形で語るというスタイルは、英語・フランス語など動詞の時制の性質が基本的に「絶対時制」である言語を用いる文化圏において強く規範化されてきたにすぎないと言える面もあるのである。今後世界的に、過去形（／完了形）と現在形（／完了形／非過去形）を併用する物語叙述（本稿ではとりあえず相対時制的な語り方としておく¹³）について研究が進展することを期待したい。

こうした言語を通じて相対時制的な語り方を自然なものとして感じる素地をもった話者が英語やフランス語を用いて小説を書いた場合、そのテキストには過去形と現在形の交替現象が観察されることが多い。北アフリカのフランス語表現作家たちにはこの傾向が顕著であり、それは書き手がフランス語に習熟していないためと解するよりは、フランス語による文学的な物語叙述法のヴァリエーションであり、さらにはその新たな可能性の開拓であると見ることもできるのではないだろうか¹⁴。

なお本研究で『貧者の息子』を物語叙述の観点から研究の対象テキストとすることは、この作品を生み出したフェラウンの文学創作の動機をより詳細に検討することにもつながるだろう。なぜならこの作品について初めて精緻な分析的研究を施したと言えるマルチヌ・マチュー＝ジョブの著作¹⁵が副題に「ある」すなわち新たな「古典の誕生」と掲げて明確に主張しているように、フェラウンはフランス文学の大伝統に与することを目指したのではなく、他のフランス語作家たちには成しえない新たな観点で、みずからの属する社会とそこに生きる人々を文学作品として描き出すことを使命と感じて執筆を企図したからだ¹⁶。1950年の刊行と同時に非ヨーロッパ人として初めてアルジェ市文学大賞を受賞し、アルジェリア現地民の姿を現地民自身が描いた初めての本格的な小

説と言われるこの作品の創作にあたって、作家が凝らしたさまざまな工夫と、必要なものとして編み出した文体について、本研究ではその効果とともに精査していく。

またこの作品を分析対象に据えるにあたって、研究上の利点として特筆しておきたいことがある。それは、この小説にはオリジナル版のほかに、フランス語母語話者である小説家エマニュエル・ロブレス¹⁷が文面の手直しをおこなったと推察されるバージョン（スイユ社から1954年に出版された再刊行版、以下本稿では「スイユ版」と呼ぶ）が存在することである¹⁸。原作者自身が完成させた初版のテキスト¹⁹とフランス人読者にとって読みやすかたちに洗練されたスイユ版の二つのテキストを対照させることによって、一般的にフランス語話者が抱いていると思われる物語叙述についての暗黙の規範意識（修正者がこうすればわかりやすく、読者にとってより受け容れやすいと思った語り方）について確認することができるとともに、一層明確に作家の工夫した物語叙述の特徴を抽出することができる。こうした比較検討がおこなえることは文体の研究上の大きな利点である。また本稿が主たる対象テキストとして分析するのは、あくまでも1950年刊行の初版であることを再確認しておく²⁰。

2. フランス語の現在形の機能について

作品の分析に入る前に、フランス語の動詞の現在形について、言語学的な研究の成果をもとに、予備的な概観をおこなっておきたい。

フランス語の動詞の現在形は、幅広い機能をもつ時制である。発話時との「同時性」を基本用法とする考え方が一般的だが、言語学の分野ではこれに異を唱える研究が多く出ている²¹。こうした立場から小熊和郎は論文「フランス語現在形と不定性」²²においてフランス語の現在形について総合的な研究をおこなったが、その出発点として現在形の「カメレオン」的な性質²³を指摘している。以下、この論文を主に参照しながら、フランス語動詞の現在形の特質を大まかに押さえておきたい。

まず動詞アスペクトの観点から見て、フランス語の現在形は、現在「継続」中の過程についても、静的な「状態」や「属性」についても、反復的な「習慣」についても表すことができる。さらに時制（テンス）の側面においても、「予定」として未来の事柄や、近い過去の事柄についての表現をおこなうことができる。このため現在形は「定義を持たない」とも言われるほどである。以下に、小熊が挙げている代表的な例を示す。

- ① 継続：Il *dort*. 「彼は [今] 寝ている。」(英語では現在進行形となる。He *is sleeping*.)
- ② 習慣：Il *boit*. 「彼は酒を飲む [習慣がある]. / 酒が飲める人だ.」
- ③ 未来 (予定)：Bon, alors demain, qu'est-ce que tu *fais*? 「さてと, 明日は何する?」
- ④ 近接過去：Monsieur Dubois? Vous ne l'avez pas rencontré dans l'escalier? Il *sort* à l'instant.²⁴ 「デュボワさんですか? 階段で会いませんでした? たった今出たばかりですが。」(英語では現在完了形となる。He *has just left*.)

ほかに、実況中継で用いられる現在形がしばしば議論の対象となる。というのもこの用法では現在形が、プロトタイプとみなされる未完了のアスペクトではなく、一つ一つ完結した出来事を描く完了アスペクトで用いられていると考えられるからである²⁵。また格言や普遍的真理を述べる際の現在形がある。これはいわば表現内容を時間的に位置づけずに示す無時間的な用法である²⁶。さらに本稿にとってもきわめて重要な「[語り]の現在形」すなわち物語叙述に用いる現在形がある。これは「歴史的現在」とも言われるもので通常過去形で語られる一連の物語的叙述が現在形を用いてなされるものである。小説や報道記事などで多くみかけられる²⁷。この現在形は発話の現在時との同時性を示すものではなく、発話の現在時とは切り離された用法であることが注目される。以下にやはり小熊の論文からこれらの代表例を示す。

- ⑤ 実況中継：Dubois *intercepte* la balle, il *fait* une longue passe à Dupont qui *tire*... Et c'est le goal! 「デュボワがボールを奪う。デュポンに長いパス、デュポンがシュート、ゴール!」
- ⑥ 普遍的：L'eau *bout* à 100 degrés. 「水は 100 度で沸騰する。」
- ⑦ 物語叙述：Voici vingt ans, à la fin de décembre 1971, les Britanniques *achèvent* le retrait de leurs forces stationnées “à l'est de Suez”.²⁸ 「20 年前の 1971 年 12 月末、イギリスはスエズ東岸の駐留軍の撤退を完了。」

以上のようなさまざまな機能を担いうる現在形のもつこうした「カメレオン」的性質をもとに、さらに進んで小熊がこの論文で主張するのは、現在形の「不定性」である。小熊の言う「不定性」とは、「ある特徴 p に対して非 p であると

いう事実と、 p vs. 非 p に関して無関心という事実が矛盾なく共存する²⁹ということの意味する。いわば現在形には対立関係の活用と対立関係の無効化の両方を受け止める能力があるということである。

さらに小熊が強調するのは、現在形の発話の場を考えた場合、現在形の発話時は「固定した点ではなく、常に「流れる点」」であるという主張である。これも本研究にとって重要な指摘として取り上げておきたい。小熊は現在形が許容するさまざまな用法(上記の①から④まで)を説明したのち「発話時 T_0 とは、点で表される「瞬間」ではなく、幾分か過去の過去と幾分か未来を含む「流れる今」と考える」と自分の立場を表明している。そのほか随所で強調されるこの考えは、フランス語(や英語)における言表の発話時を「発話時点」として無前提に点的なものと捉える一般的な理解に対するきわめて重要なアンチテーゼである。「発話時」そのものに時間持続を見るこの考え方は、とりわけ『貧者の息子』の物語行為の時間(時点)を考察する際に有効なものとなる。本研究ではこの問題を次回の論文で取り扱う。

なお、小熊は物語叙述に用いられる現在形についても興味深い分析をしているが、これについては他の論者の指摘とも合わせ、本稿のⅢ. 3. 3)で触れることとする。

ここまで、現在形が「今起きている事柄を表す」という用法以外のさまざまな機能をもちえる動詞形態であることを確認した。その多彩な機能を捉えた上で、小説作品を扱う本稿では細かなアスペクト等の違いに拘らず、物語言説のなかで現在形が用いられる大きなタイプの違いとして、以下の4つを区別することとする。それぞれが用いられるケースについて若干の説明を付しておく。

- [A] 語り手表出の現在形：語り手からのコメント、および語り手自身に関する言及をおこなう場合。語りの現在時にまつわるさまざまな情報を含む。
- [B] 一般的真理の現在形：格言や普遍的な真理、一般論を提示する場合
- [C] 物語叙述の現在形：物語世界の出来事や状況を現在形で叙述する場合
- [D] 自由語法³⁰の現在形：登場人物の声をそのまま地の文が伝える場合

さきに紹介した、フランス語現在形がとりうる①～④の用法(継続、習慣、未来、近接過去)はこのA・C・Dのいずれにも見ることができよう。Bの普遍的な真理・一般論の用法は上記の⑥(普遍的)に合致する非時間的な用法である。また上記の⑦(物語叙述)として掲げたものに相当するCの物語叙述にお

ける現在形は⑤（実況中継）の用法とも深く関係する。

このA～Dの4つのタイプ区分のうちA～Cの3タイプについて本稿で扱い、Dの自由話法については現在形の特徴だけに限らないより広い議論も必要であるので次回の論文で扱うこととする。

なお本稿での分析に入る前に、現在形が「カメレオン」的に多様な用法を許すだけでなく、小熊が「不定性」として強調するように、動詞の使用にまつわる時制やアスペクトなどのさまざまな対立関係の上に立って機能する側面と、そうした対立関係とは無関係に、すなわち対立関係を超越したあり方によって機能する側面とが並立するという点を本質的な特徴として掲げたことに再度着目したい。本研究が『貧者の息子』の語りの特徴として注目したいのも、A～Dの4タイプの現在形がそれぞれ別個に、ある意味で対比的に使用されるのと同時に、それらの区別を無効化するような連続的な使い方がされている点だからである（この現象についても次回の論文で検討する）。そしてこうした言語の用い方を通じてフェラウンが、わたしたち——この「わたしたち」をどう規定するかが文学を論じるときの大きな問題であるが——の認識を支えている種々の価値基準や対立関係を利用すると同時にそれを問い直す小説を生み出したことを、彼の文学の最大の価値であると本研究では考えていることをあらかじめ述べておきたい。

Ⅲ. 『貧者の息子』の語りにおける現在形

本稿ではフェラウンの処女作において上記A～Cの3つのタイプの現在形がどのように用いられているか以下に詳細に検討するが、その前に、この作品の特徴について基本的なことを押さえておきたい。最初に確認しておくべき点は、『貧者の息子』が小説として典型的な三人称叙述の形式をとっていないことである。

『貧者の息子』は、フルル・メンラドというカビリー地方の小学校教員が自分の幼い頃から現在までのもろもろの出来事を、周囲の人々についての情報を大いに交えながら語る、自伝的回想形式をとった小説である。作品冒頭の文 *Menrad, modeste instituteur kabyle, vit « au milieu des aveugles ».* (p.7) 「カビリー地方の片田舎の慎ましい教師メンラドは「盲たちに囲まれて」暮らしている。」(11頁)³¹など何か所かでは実質的な語り手であるフルルを紹介する大枠の語り手からの叙述が存在するが、作品のほぼ全体が、教師フルルによる回想

として提示されている。ただし、語りの形式は以下に見るようにやや複雑な変化を見せる。

作品は三部に分かれている³²。作品冒頭の導入部でもある第一部第1章で、それ以降の作品の本体にあたる部分が、フルルの記した回想の文章を転載した(大枠の語り手とともにこれからそれを読者が目にする)ものであるという設定が示される。第一部第2章以降第一部末まではその回想録の内容であるとされており、教師となったフルルが幼い頃の主人公フルルをje「私」を用いて示す「一人称小説」(ジュネットの用語で言えば「等質物語世界的な」語り、そのなかでも自分を主人公にしている回想であるため「自己物語世界的な」語り³³)の形式をとっている。

ところがこのスタイルが作品末まで一貫して用いられるのではなく、語りの形式は途中で変化する。第一部と違って第二部・第三部は、登場人物としての主人公フルルを三人称で指示する、いわゆる「三人称小説」(「異質物語世界的な」語り)の体裁をとっている。ただし第一部との内容的・テクスト的な連続性からも、またフルルへの内的焦点化(フルルをクローズアップするだけでなく、フルルの視点をとった情報提示が多くなされる)が引き続き維持されていることから、フルル自身による回顧的な語りでありながら文体としては自分を指すのに三人称を採用している叙述スタイルと見るのが適切である。いわゆる「三人称の自伝」の形式だと言える。

一人称(的な)小説では、物語内容を語る語り手自身も人物化される。語り手の存在度はさまざまであるが、副題に「カピリーの教師メンラド」と明確にうたい、語り手である教師フルル・メンラドの存在を強調しているこの作品では、登場人物の「私」だけでなく、語り手としての「私」も作品の重要な構成要素となっている。

このことが、さきにAのタイプとして示した、語り手のコメントが披露される現在形や語り手自身の状況を語る現在形が、この作品においてかなり頻繁に用いられることとつながっている。その語り手のコメントと連続するものとして、Bとした、一般的な命題に類する主張や格言的な言説の引用が多く現れる。また語り手の存在度が大きいだけに、より自然なものとしてCの現在形の物語叙述が頻出する。語り手が自分の過去の経験を生き生きと眼前に思い浮かべているためだととりあえず受け取れるので、現在形の使用にも不自然さが薄いことは確かであろう。

それでは以下に各々のタイプについて、詳細を検討することにした。

1. 語り手表出の現在形 [A]

1) 語り手の存在と物語行為そのものの強調

この小説では語り手自身についての言及がしばしば現れるが、そのなかからいくつかの特徴が指摘できる。

まずこの作品の語り手の特徴は、自分の物語行為や回想という活動そのものについて非常にしばしば言及することである。(下線による強調は稿者による。以下同様。また引用例には、議論の便宜を図って通し番号を付す)。

- (1) Je me souviens, comme si cela datait d'hier, de mon entrée à l'école.
(p.60)
「私はまるで昨日のことのように、私が小学校に上がった日のことを覚えている」(70頁)

ストーリーの提示という面ではほとんど情報的価値のないこうした言及の例は無数にある。短いものでは、Je crois que「思うに」(p.24), Je me rappelle「覚えているのは」(p.47), je dois ajouter que「付け加えなくてはならないが」(p.60), Il est certain que「確かなことは」(p.32), Il est vrai que「ほんとうに」(p.33), Voilà pourquoi「こうした理由で」(p.41), Certes, voilà「なるほど、こうしたことは」(p.25), Oh! oui「ああ！まさにそうだ」(p.22), Pour ça oui.「まったくそのとおりである。」(p.49), Hélas!「ああそれなのに!」(p.59) など導入句あるいは挿入句的な表現が、ストーリーを追いたい読者にもあまり邪魔にならないかたちであちこちに散りばめられ、たえず語り手の存在をテキスト上に浮かび上がらせている。

上に引いた(1)と同様、より目立つ長い例も数多くがあるが、さらに作品の比較的冒頭の箇所から二つだけ挙げておこう。

- (2) Cependant, je dois dire que les efforts conjugués de toute la famille n'ont pas abouti au résultat envisagé (p.28)
「しかしながら、家族中の努力を結集したものの、願った結果には達しなかったことを私はお伝えしなくてはならない」(34頁)
- (3) Aussi loin que je puisse remonter dans mes souvenirs, je retrouve toujours auprès de moi une chaude et naïve amitié. L'image la plus

reculée qui surgit subitement dans ma mémoire est celle (...) (p.27)

「記憶を遡れるだけ遡ってみても、思い出せるのはいつも友達との温かい素朴な関係に私が包まれていたことだけである。すぐに浮かんでくる一番遠い記憶は、(……)」(34頁)

ともに、第一部第4章になってようやく主人公フルルすなわち自分の誕生に触れただけに現れる文章である。このようにテキストは、主人公を中心として登場人物たちが活動を繰り広げる物語世界のなかに読者が完全に沈潜してしまうのを妨げるかのように、それを回想し記述する語り手の存在を執拗に喚起する。

上のように語り手が、物語る主体・回想する主体として自己を表出するだけでなく、自分がすでに提示した物語言説に対して言及することも多い。

(4) Voilà donc l'énumération exacte des signes extérieurs de richesse. (p.17)
「目で見てわかる裕福さは以上で全部だ.」(21頁)

(5) Parbleu ! ils ont choisi l'honneur, les Aït Moussa. (p.23)
「そのとおり！アイト・ムサの男たちは名誉の方を選んだ.」(29頁)

(6) Ils [= les vieux] en savent quelque chose ! (p.18)
「まったく老人の知恵はあなどれないものだ！」(23頁)

語り手は物語内容を提示するとともに、これらの例のように主観的な判断を含めたメタ的なコメントを頻繁に付すことで、語り手としての存在を一層高めるとともに、この作品に特徴的な相対主義的な視線³⁴を作品に帯びさせる。上に挙げた三例はいずれもアイロニーを込めた表現であり、読み手がそのまま単純に受け取らないようにと企図された反語である。(4)は「裕福さ」の証左とはとても言えないような事柄を挙げたうえでのまとめの説明であり、ほとんど自虐的なユーモアが感じられる。(5)は自分の叔母たちに対する親戚の男たちのひどい振る舞いについてのコメントであり、故郷の人びとに対して語り手が批判的な評価を表明していると読まざるをえない。(6)はむしろ、フランス人などよその人びとから真つ当な敬意を払われたことのないカピリー地方の老人たちについて、やや誇張的な表現によってユーモアをかぶせながらも、温か

な尊重の念を提示したものと感じられるが、感嘆符はかえってカビリーの老人たちを信頼しきってしまうことにも留保を付しているように思われる。語り手はこのように自分の語った内容に対してメタ的な距離をとってなんらかの屈折したコメントを提示することにより、読者に対しても叙述内容を受け取りながらたえずそれを批判的に相対化する姿勢を促しているように思われる。

語り手の発話者としての存在を強く打ち出す表現として疑問文も多用される。主人公をめぐるストーリーが始まる前の第一部第2章でカビリー人の生活文化を紹介する記述から挙げておこう。

- (7) En bonne logique, comment exiger qu'une rue faisant partie d'un chemin, soit traitée autrement que ce chemin ? Pourquoi faut-il la paver si ce chemin n'est pas pavé ? (p.12)

「街道の一部を成しているこの通りに、街道と違う扱いを施すことなどできないのが当然ではないだろうか？ 街道が舗装されていないのだから、村の通りを舗装するわけがあるだろうか？」(15頁)

こうした疑問の提示は語り手が読み手を前にして語りかけをおこなっている印象をもたらす。一般に語り手の存在の強調はしばしば読み手への働きかけと結びつく。『貧者の息子』でも語り手は折に触れて読み手に呼びかけ、読み手を作品に誘い込むような言葉を発する。

- (8) On serait peut-être étonné si j'ajoutais que ce prénom, tout à fait nouveau chez nous, ne me ridiculisa jamais parmi les bambins de mon âge (p.27)

「この名前が私の地方にはないまったく風変わりな名であったにもかかわらず、私が同世代の子供たちから一度もからかわれたことがないと付言したら、みなさんはたぶん驚かれることと思う」(33頁)

- (9) Curieux, descendez tous les mois environ à Tankout ! Lorsqu'on distribue de l'orge. Au mois de décembre par exemple. Vous comprendrez alors que s'il y a un Dieu quelque part, Hitler paiera ce crime comme il en paiera d'autres plus grands. (p.188)

「なぜと思う方は、毎月のようにタンクトへ降りて行ってみるがいい！」

大麦の配給の折に、たとえば十二月に、そうしたらあなたはおわりになるだろう、もしどこかに神様がいらっしやるのならば、ヒトラエをほかのもっと大きな罪と同じように、この罪によっても罰されるにちがいない、と。」(215頁)

むろんこの「読み手」はあくまで作品内で語り手が想定している作品内存在としての潜在的な読み手（すなわちイーザーの言う「内包された読者」³⁵）であるが、こうした読み手への呼びかけは、この作品では単に修辭的な技法に留まらず、作品外に存在する現実のんびとへ作品を通して訴えかけようとする作者の創作意図の表れでもあるように思われる。作者はカピリー地方を遠く離れたおとぎ話の国のように提示するのではなく、20世紀半ばの世界中のんびとに向けて、身近に思いを馳せてほしい場所、同時代の「人間」が生きている場所として提示するためにこの作品を書いたと考えられるからだ。この点については、とくに次稿においてほかの要素をも根拠として取り上げながら議論したい。

なおここでさらに補足的に、この作品がどのような潜在的読者に向かって書かれているのかについて、スイユ版との比較によって見えてくるテキストの特徴をもとに触れておきたい。マチュー＝ジョブは、オリジナル版で巻末に付されていたカピリー関連の用語を解説する語彙集が、スイユ版では脚注形式で付されるとともに、いくつかの項目はなんの説明も付されないことになったことを指摘している³⁶。実際数えてみると、初版の語彙集では23項目が立てられていたが、スイユ版の脚注は8か所でうち一つは新たにchouari「振り分け籠」（カピリー語）という語に付されたものである。したがって16の語が解説なしとなった。なにも解説が付されなくなったのはたとえばcadi「^{カディ}法官」、djinn「ジン、魔物」、taleb「^{ターレブ}大先生」、marabout「マラブー、道士」といった語である。これらは北アフリカの文化に少しでもなじみのある人間であればよく見聞きしたことのある語だと言える。cadiやmaraboutは現在多くのフランス語辞書にも載っているほど一般化している。ここからわかるのは初版では北アフリカ地域のことをまったく知らない人もこの作品の読み手として想定していること、逆にスイユ版は（ちょうどロブレスがそうであったように）カピリー地方の特殊な語彙は知らなくとも、北アフリカ地域で一般的に使われる語はすでに知っている読者を無意識に想定していることである。したがって初版の語り手はスイユ版の語り手よりも一層広い範囲の人々に向けて語っていると言うことがで

きる。そして次の引用(10)に見られるような読み手への語りかけは、こうしたまったく北アフリカに無縁だった人びとにも、想像を通じてカピリーの環境に身を置き、カピリー人になってみることを促していると考えられる。土地の貧困なカピリー地方で第二次大戦中の食糧難を生きる苦勞についてのくだりである。

- (10) Ceux qui ont des terrains cultivent la moindre parcelle, sèment de l'orge. Uniquement. « Retour à la terre ! » Et quelle terre ! On sème un double pour en récolter autant ou un peu moins. Surtout lorsqu'avant la moisson, un beau matin, vous trouvez votre champ fauché pendant la nuit par votre voisin qui était honnête homme ! (p.192-193)

「土地のある者はすみずみまで耕して大麦を播く。ただひたすら。「大地に戻れ！」というわけだ。しかしなんという大地だろう！二倍播いたところで収量は同じか、むしろ少し減ってしまうぐらいなのだ。その上、刈り入れ間近のある朝、あなたは自分の畑が夜のあいだに根こそぎやられてしまったのを発見したりする。しかもその犯人が、もとは正直者で知られたあなたの隣人のあの男だとは！」(220頁)

むろんフランス語では、記述のなかでvousを交えた言い方は、とくに聞き手・読み手への働きかけを意味しない場合も多いが、ここではまさしく人類普遍の格言であるような「大地に戻れ」という言い回しをカピリーのある時期の特殊なエピソードに援用して状況を一般化しながら、読み手をまさに作品世界の当事者に成そうと試みていると受け取れる。

さて、以上に検討した語り手の存在の強調から読みとれることとして、このテキストが、物語行為そのものを大きな主題としていることを強調しておきたい。むろん、作品外の現実と作品の内的特質を安易に結びつけることは避けなくてはならないが、フェラウンがこの作品の執筆を始めた当時、カピリーの人々についてカピリー人自身の立場から物語られることがなかったことが彼の創作の大きな動機となったと推察される³⁷。フェラウンは、自分たちがどのような存在であるかを示すだけでなく、自分たち自身を語る自分(たち)の姿そのものを、作品を通して提示しようとしたのではないだろうか。語る内容とともに語る主体としての存在の痕跡を強く残し、物語る主体としてのカピリー人を立ち上げることがこの作品の創作動機と強く結びついているように思われる。

2) 過去と現在、物語内容と物語行為との接続

『貧者の息子』では、上に見た語り手のコメントを示す現在形の導入節の後に、物語叙述の一般的ルールに沿って物語内容を単純過去形で提示する言表が続くこともよく見られる。二例挙げておく（明確に語り手のコメントと考えられる部分に下線を引き、動詞の単純過去形をイタリック体にする）。

- (11) Je ne me rappelle pas combien de temps il nous *fallut* pour explorer le quartier (...) (p.32)
「私たちが地区をくまなく探索し（……）になるまでにどのくらいの時間がかかったか、今では覚えていない。」(39頁)
- (12) Je suis bien certain que c'est tout à fait par hasard (...) que l'instituteur *parla* de moi à mon père. N'empêche ! Cette scène *décida* de mon avenir d'écolier. (p.64)
「先生が（……）父に私のことを話したのは、まったく偶然だったことを今では私は確信している。だが事情はどうでもよい！ この出来事が学業における私の未来を決定したのだ。」(76頁)

本稿 (25) (26) (27) の引用でもこの現象は確認できる。またこれらのように現在形の（あるいは発話の時点と起点とする単純未来形等の）動詞を伴った節の形ではなく、語り手の主観を表すモダリティの副詞（*heureusement* 「幸いなことに」、*probablement* 「おそらく」など）が単純過去形を用いた語りのなかに現れる例はこの作品では数え切れないほど存在する。この現象は、語り手の介入が見られる小説テキストではとくに珍しいことではなく、読み手はほとんど何の抵抗も感じないことであろう³⁸。

こうした例が興味を引くのは、バンヴェニスト³⁹の区別した「ディスクール」（発話者との関連をもった言説）と「イストワール」（誰も語っていないかのような発話者の存在が消去された言説、単純過去形の使用を特徴とする歴史叙述や小説の物語）が一つの文および一続きの文章のなかで共存しているからである。スタンダールの『赤と黒』のような三人称を用いた客観的な記述のスタイルをとる小説においてすら、数行にもわたって語り手が作中人物に対して批判的な意見を開陳するなど顕著な語り手の介入は可能で、語り手の主観的なモードは原理的に排除されるわけではない。ましてや、一人称小説のように、物語

世界内に位置づけられた語り手が物語行為を行う場合、単純過去形の使用はただちに「誰も語っていないかのような」語りを意味しない。それはすくなくとも「誰も語っていないかのような」語りに近い語り方を、主体的に語り手が採用しているということを示すことになる。バンヴェニスとによる二大区分が示唆するのは異なって、単純過去形による物語叙述はある程度語り手の主体性・主観性を帯びている（あるいはそれが可能である）とすることができるのである。

単純過去形による物語叙述が語り手の現在のありようや主体性の表現と地続きである例は、自伝的回想録では稀ではない⁴⁰。以下にジュール・ミシュレの回想録『私の青年時代』（1884年）から、二つの例を引く。いずれも中学生時代に経験した極度の貧困と飢餓状態のなかでの暮らしについての回想である。なおこの作品は、『貧者の息子』のスイユ版では第二部のエピソードとしてその一節が採られているものであり、フェラウンの作品との類縁関係についても関心が寄せられるところである⁴¹。

- (13) Ma taille, plus petite que celle des autres membres de ma famille, une maigreur singulière des extrémités, rappellent que mon enfance ne fut point nourrie. (...) Si j'ai survécu, c'est que, malgré les souffrances et la santé ruinée de ma mère, la saine constitution de mon père prévalut en moi.

(Michelet, *Ma Jeunesse*, p.119)

「家族の他の者たちに比べて〔現在〕私の背が低く、手足が異常ほど細いことが、私が子供時代にまったく食べ物が足りていなかったことを告げている。(……) 私が〔今日まで〕生き延びてこられたのは、母親は苦悩に打ちひしがれ健康も害してしまったけれども、父親の健全な体質の方が強く私に受け継がれていたからである。」

過去の経験と語り手の現在の状態とが直接的に結びつけられているこのくだりにおいて、単純過去形が発話者（語り手）とまったく切り離された世界を提示するために用いられているのではないことは歴然としている。ミシュレの同じテキストからの次の引用では、セミコロンやピリオドによって隔てられてはいるものの、語りの現在時においておこなわれる語り手のコメント（下線で示す）と半過去形を用いた物語叙述とが文章の流れのなかで途切れなく結びついている印象を与える。

- (14) Le plus sage eût été d'entrer chez le boulanger; mais comment trahir ma pauvreté en mangeant mon pain sec devant mes camarades? D'avance, je me voyais exposé à leurs rires, et j'en frémissais. Cet âge est sans pitié...

(Ibid., p.118)

「一番賢明なのはパン屋に入ることだったろう。でもどうして学友たちの前で乾パンをかじって自分の貧乏ぶりを晒すことができようか？店に入らぬうちから私は嘲笑を浴びている自分の姿を思い浮かべ、戦慄した。この年齢は情け容赦のないものだ……。」

この引用部冒頭の、過去の事柄についての反実仮想（条件法過去第二形としての接続法大過去形 eût été が使用されている）が、過去の事柄に対する語り手による主観的なアプローチをよく示していると言える。

貧困と飢えのなかでの生活の回想、そうした生活における人間の見栄や人間関係の複雑さといった内容から考えてもフェラウンがミシュレのこの回想録に大きな影響を受けたことは容易に推察がつく。しかしそればかりでなく、自伝的叙述によって過去の事柄と現実世界の現在の自分とを結びつけ、物語として過去を提示しながら、生きた発話としての語り手の声をそこに重ねていくことで、過去の世界を現在とまったく隔絶された世界としてでなく浮かび上がらせるこの語り方をフェラウンはミシュレから受け継いだのではないだろうか。

ミシュレの回想録と同様に単純過去形で物語られる内容が発話行為者である現在の語り手と結びつくものであり、物語られる過去の世界と語り手の現在の世界がつながっていることを、『貧者の息子』のテキストはしばしば喚起している。一つだけ例をあげる。単純過去形と半過去形に置かれた動詞をイタリック体にし、現在形を用いた物語行為時点での語り手に関する記述を下線で示す。

- (15) Le ton dont elle *disait* cela *signifiait* sans erreur possible que *j'étais* un ennemi. J'entends encore la voix de Héliima, je vois son regard méchant. Je compris très tôt sa haine. (p.30)

「この台詞を言ったヘリマの調子は、まちがいなく私を敵だと宣言していた。今でもヘリマの声私の耳に残っているし、意地悪な目つきが浮かぶ。とても幼いうちに、ヘリマに憎まれていることを私は感じとった。」(37頁)

このように語られる世界とそれを語る行為が別次元にあるものとして切り離されないこの作品では、過去（物語世界）の出来事と語りの現在をつなぐものとして、複合過去形の文章がしばしば用いられるのも特徴である。以下では、過去のものとして物語内容を叙述する単純過去形と半過去形をイタリック体にし、複合過去形には二重の下線を引いて示す。

- (16) Ce brave oncle ! Il *était* plus gamin que moi. Que de futilités pour lesquelles je le *faisais* courir ! Il m'*a* sans doute pardonné dans la nuit de son grand repos. (p.34)

「ああ、なんてお人好しの伯父さん！ 私よりも子供っぽい人だった。私が告げ口したつまらぬことで一体何度、伯父は駆け出すはめになったことか！ けれども闇のなかで今は静かに休んでいる伯父は、もう私を赦してくれているのではないかと思う。」(42頁)

- (17) Plusieurs fois, je l'ai su par la suite, Ramdane *eut* la gorge serrée en voyant travailler son aîné. (p.82)

「あとで私は知ったのだが、ラムダンが兄が畑仕事をするのを見て、何度も喉を詰ませたという。」(95頁)

これらの例では複合過去形は、単純過去形で語られる物語世界から語りの現在時点まで橋渡しをする連続的な紐帯を生み出している。また次の二例では語り手の位置する世界が現在形および（語りの現在時を起点とする）単純未来形を用いて明確に示され（引用ではともに一重下線を付す）、物語内容の時点からこの現在時に至るまでに生じた事柄が複合過去形で言及されている。

- (18) Et on ne *parla* plus de lui. Je crois qu'il est mort à présent. Tout le monde le dit. Quant à moi, à tort ou à raison, je lui en voudrai toujours. Il a fait mon premier malheur. (p.91)

「その後は、彼〔＝叔母ナナの夫オマル〕の話は出なくなった。今はもう死んでいるのではないかと思う。みんなそう噂している。ともかく私は、正しかりょうが間違っていようが、これからはずっと彼を恨み続けるだろう。彼こそ、私の人生の最初の不幸の元凶となったのだ。」(105頁)

- (19) Petite sœur, qui es maintenant mère de famille, ton vœu a été exaucé. Dieu t'a gardé ton mauvais petit frère. (p.29)
「今では一家の母となっている小さい姉さん、願いは叶えられましたね。神様はあなたのそばにあなたの悪い弟をずっと置いてくださいましたものね。」(36頁)

どちらの例でも、語りの現在時の世界を明示するために、à présent 「今は」、maintenant 「今では」といった副詞(句)も活用されている。またこの二例では、語り手フルルの存在が非常に強く表出されているだけではなく、語り手をとりまく他の人々((18)では村の人びとを含意する tout le monde 「みんな」、(19)では姉のティティ)も存在を喚起されていることが特徴である。とくに(19)では語りの現在時に存在するティティに向けて呼びかけをおこなう表現になっているために、その存在感が強い。ほかにも、語り手以外の人びとを語りの現在時の存在者として浮かび上がらせる表現例が、この作品では多く見られる⁴²。幼少期の出来事をストーリーとして提示することが目的であるならほとんど邪魔であるこうした語り手の存在世界の喚起は、現在完了的な機能をもつ複合過去形によって、すでに見たように(単純過去形で表される)物語内容の世界と接続されることで一層強化されている。『貧者の息子』がときに虚構作品であることを忘れられて作者自身の正真正銘の自伝として受け取られやすい⁴³のも、語り手の審級が抽象的なものでなく、回顧的に語られる物語内容の延長上に多くの人物たちの共生する一つの現実味を帯びた世界を構成しているからであろう。

物語内容の世界と語り手の現在世界とをつなぐ複合過去形には、語り手の主観を強く含みつつ、物語内容を素材にして、この作品のメッセージとも言える一般的な見解を練り上げていくという機能も読みとれる。以下は、自分が通った村の小学校の二人の「原住民」の教師が、「フランス風のスーツ」の上に伝統的な衣装である「白く輝く上等のフルヌース外套」を羽織っていたことを回想したくだりに現れる文章である。複合過去形のみ二重下線で示す。

- (20) Cette tenue m'a paru, pendant longtemps, avoir atteint l'extrême limite du goût, de l'élégance et du luxe. Quant aux maîtres eux-mêmes, ils constituent jusqu'à présent, pour moi, sans que je puisse m'en empêcher, le double « schème dynamique » sous lequel je me représente

invariablement l'instituteur indigène, le directeur et l'adjoint. (p.61)

「この服装が最高に贅沢で、エレガントで、趣味のいいものだと私はその後、長いあいだ思っていたものである。先生たち自身について言う、今に至るまで私にとってはこの二人が、現地人の教師や学校長や補助教員を思い浮かべるときに、どうしても思い描かずにはられない「生きたモデル」であり続けている。」(72頁)

こうした折衷的な服装は、おそらくヨーロッパ人から見れば滑稽と受け取られそうな装いかもしれないが、現地の人間にとっては最も粹で洗練されたものとして映ったということを示すこの語りは、これを読む人に自分の考えを相対化する機会を与えるであろう（ヨーロッパ人であれば新しい見方を知り、北アフリカの人であれば漠然と感じていた自分の感覚に納得したり、ヨーロッパ人と同じ見方に立ってこうした服装を恥ずかしいと思っていた気持ちを考え直させられるだろう）。日本人の私たちにしても、明治時代に流行していた和装に「インパネス」を羽織る男性の服装や袴姿に「リボン」の髪飾りをつける女学生の姿がいかにも優雅でおしゃれな感じがするが、納得のいくところであり、フェラウンのこの見方の提示は、日本で言えば和洋折衷、広く言えば地域的・伝統的なものと外来の西洋的・現代的なもの組み合わせ、より一般的に言えば異種混淆の美学を肯定したものである。この引用で示されている価値観の提示は次のⅢ. 2で論じる一般的な真理の提示の機能とも通じるものであり、この作品に特徴的な語り手の人物化と語り手の発話状況の強調が、虚構の物語を通じて、現実世界を生きる私たちのものの見方を変更する働きかけをおこなおうとしていることと通じていよう。そしてそれに続く、無名の現地人田舎教師を最高の「モデル」として称揚する語り手による付加説明もまた、カビリーの名もない「ふつうの人びと」を描くことをこの作品が目的としていることをよく示している。

なお補足として、以上に見た物語内容と語りの現在を結びつけるさまざまな手段の積み重ねによって『貧者の息子』では、すでに論じたように、単純過去形を用いて叙述される虚構上の過去の世界が、語りの現在の現実的世界と隔絶されたものではなく、なっていることをもう一度確認しておきたい。それを端的に示す例として、以下の(21)(22)のように、語り手による物語内容をめぐる問いかけや語り手の付加する感慨（下線で示す）が単純過去形（イタリック体で示す）を用いて表現された文を挙げておきたい。

- (21) S'en aperçut-elle ou fut-ce le hasard voulant châtier ma poltronnerie?

Ma tante m'empoigna (...) (p.101)

「彼女 [=私の叔母] にはそれがわかったのか、それともあれは、怖気づいた私を罰する偶然の作用だったのか？ 叔母は私をがしっと驚づかみにした (……)」 (116 頁)

- (22) Quelle triste journée nous passâmes ! (p.102)

「なんと悲しい一日を私たちは過ごしたことか！」 (118 頁)

もともとの作品がとっている一人称叙述による回想形式が、この単純過去形を用いた主観的モードの言表を自然なものとして可能にしている。過去形で語られる生活情景は、現在に結びつけられると同時に、証言者・媒介者である語り手の存在を通じて主観的に捉えられた生きた事実として、その事態が生じる社会の内側から表現されるに至るのである。

以上、バンヴェニストによれば峻別される単純過去形の使用を中心としておこなわれる語り（「イストワール」）と現在形を中心としておこなわれる言表（「ディスクール」）がこの小説においては接続していること、それによって、物語内容の世界と語り手の位置する世界とが連続性を持っていること、そしてこの二つの世界をつなぐものとして複合過去形が活用されていることをみた。さらにこうした語り方をおこなうことの効果として、物語内容をもとしたメッセージを現実の読み手に対して訴えかけること、および、現実の読み手を作品世界に（そしてその舞台であるカピリー地方の生活空間に）引き入れることが考えられる、との主張をおこなった。

3) 不可知の強調

最後に、『貧者の息子』の語り手によるコメントの大きな傾向として、記憶の不確かさや欠落、情報の欠如などを強調して、自分の語りが十全な信憑性をもったものではないことを再三強調している点を指摘しておきたい。これも枚挙にいとまがないが、典型的な事例をいくつか挙げておく。

- (23) A quel moment et dans quelles circonstances naquit notre amitié ? Je ne saurais le dire. Dans ma mémoire, le petit Fouroulou (...). Cependant, rien n'explique notre attachement. (p.31)

「私たちの友情は一体いつ、どんないきさつで生まれたのだろうか？
 どうもよくわからない。私の記憶のなかでは、幼いフルルは（……）。
 しかし、なぜ私たちがこれほど仲が良かったのかは依然として謎である。」（39頁）

- (24) J'ai beau fouiller parmi mes souvenirs, je ne retrouve rien de clair.
 (p.60)

「思い出をひっかけ回してみても、何もはっきりしたことが浮かんでこない。」（72頁）

- (25) Je serais très embarrassé de dire si je fus bon ou mauvais élève, si j'appris beaucoup ou peu. (p.61)

「自分が良い生徒だったか悪い生徒だったか、勉強ができたかできなかったかは、何と言ったらよいのかよくわからない。」（72頁）

結局はこうした前置きをしたうえで、語り手は回想を語るのである。逆に言えばこの作品の語り手は、自分の述べることの不確かさを明言したうえでなければ物語内容を語らないのである。以下の例では、語り手が留保を表明している部分に下線を施す。

- (26) Je ne peux pas dire exactement combien tout cela dura, mais je me souviens bien d'une soirée de printemps ou d'été. (p.89)

「どれほどこうした状態が続いたのか正確にはわからないのだが、あれが春か夏の晩であったことだけはよく覚えている。」（103頁）

- (27) Mais somme toute, ils passèrent ainsi une période paisible dont Fouroulou ne garde qu'un vague souvenir. Il ne se rappelle avec précision que les mauvais moments de son enfance. (p.114)

「しかし、大まかに見れば、この頃はそれなりに平穏な暮らしで、フルルには漠然とした記憶しかない。鮮明に覚えているのはただ、子供時代でも悪い時期のことである。」（130-131頁）

覚えていない、わからないとまずは言っておいて回想を語るこの形式は、ある

事柄を言わないと言いながら言う逆言法（パラレプシス）という修辞技法を用いた表現形式である。ここでこの小説の第二部以降の全体が、フルルが「書かなかったこと」として提示されていることにも注意したい。テキストの文面の分析ではないので、日本語訳でのみ示しておく。第二部第1章の冒頭部分からの引用である。

- (28) 以上が、メンラド・フルルの罫線入りの大判ノートを開ければ誰でも読める、未完の告白録である。(……)

言わずもがななので語りはしないけれど、子供時代のことや学校時代に起こったもろもろのことを彼は何一つ忘れてはいない。昔を思い返すたびに、具体的なさまざまなシーンが(……)目の前に浮かんでくる。(……)

彼は告白録の筆を折る。そして、叔母二人を亡くしたのと同じ年、みなが少しは幸せなことが訪れるようにと願っていた時に弟が生まれたことを、またその子がダダルと名付けられ、この男の子の誕生によってヘリマがまたぞろ愚にもつかない怒りに駆られたことは、触れないままでいる。かくしてフルルは一人息子という肩書を失ったが、代わりに長男という肩書を持つことになった。(129-130頁、原書 p.113)

語ろうとしても語るができなかったこと、だが回想者フルルが鮮明に覚えていて彼が回想する事柄として、以後作品の内容が提示されていく。スイユ版では第二部冒頭に（フェラウン自身が書いたと思われる）新たな序を置くことでこのくだりが存在しなくなってしまったのは残念である⁴⁴。エピローグで語り手自身によって縷々述べられているとおり、過去の全体像を把握したり、（少なくとも必要と思われる）すべての情報を網羅的に提示したり、正確で妥当な叙述をおこなったりすることの不可能性への意識が、この作品の大きな構造をも決定していることに注意を払っておきたい。

以上のように、過去の回想や自己についての判断あるいは社会についての記述がけっして十全なものではありえないことについて、この作品は強い意識をもっていることがわかる。だからこそ（分量的にも全体のなかでの印象からしても、この作品の主要部分を成すと言える第一部では）客観的で絶対的な叙述のスタイルである三人称による語りではなく、人物化された語り手による一人

称の回顧的物語叙述の形式をこの作品は選びとったのだとも考えることができる。回顧や省察というものがけっして十全なものではありえないことを、実はこの作品はそのテキストの内部で説明的に主張してもいる。以下にそのくぐりを引用しておきたい。

- (29) Les souvenirs d'enfance manquent de précision et de lien: on ne garde certaines images frappantes que le cœur peut toujours unir l'une à l'autre lorsqu'il les évoque, de sorte qu'il réussit quand même à se replacer dans une ambiance qui n'est plus. Quelques tableaux lui suffisent pour revivre tout un passé. Il semble bien que la raison soit plus exigeante, elle veut du cohérent, tandis que le cœur ne se pique pas de logique. Mais si l'on perd facilement le fil de ses raisonnements, on conserve jalousement la mémoire de ses sentiments. C'est mon cœur uniquement qui m'inspire chaque fois que je parle de mes tantes.

Voici, par exemple, une scène que je revois avec une grande netteté: je suis seul à la maison avec ma mère. (p.91-92)

「子供時代の思い出は正確さも脈絡も欠いているものだ。いくつか強烈な印象の映像だけが残されていて、思い起こす時に心のなかでそれらをつなぎ合わせる。すると、今はもうない世界のなかに、どうにか再び身を置くことができるようになるのである。ある過去の全体を心が蘇らせるには、ほんのわずかな光景があれば十分である。理性というものはもっと欲張りで一貫性を求めるが、それとちがって、心は理屈を鼻にかけたりしない。頭で考えた論理の糸はすぐに見失ってしまうものだが、感じたことの記憶はけっして失うことがないものだ。叔母たちのことを話す時にいつも私を動かしているものは、ただ自分の心である。

たとえば、私がこの上もなく鮮やかに覚えているのはこんなシーンだ。私は母と二人きりで家にいる。」(105-106頁)

最愛の叔母ナナの悲劇を語るこの作品のもっとも印象的なエピソードに入る前に記憶というものの本質的な間欠性と不明晰さをわざわざ指摘するこの部分は、回想叙述によって成り立つこの作品がどのような根底的な規定によって支えられているかについてあえて論じ、読み手に明かした非常に重要な部分だと

言える。ここでは、記憶や思い出の不十分さの上にごそ成り立つ人間の心的活動としての再構成の行為が、「理性」による一貫性を重視した再構築の行為と対比して位置づけられ、間欠的で雑多な性質をとどめた、そして主観性の高いかたちでの過去の表象こそが本質的であり重要であると主張されている。しばしば語り手の介入を削除し、物語内容のできるだけ安定した提示を心掛けるスイユ版では、特徴的なことに、引用部3行目の*de sorte que*「すると」以降、段落末までが削除されている。語り手のおこなう議論そのものを余分な凶雑物とみなす姿勢と、ここでの議論内容への違和感がおそらくこの大幅な削除の理由であったと推察される。

しかしこの作品における語り手の現在に対する強調を真剣に受け止めると、不確かだからこそ問い直しを続け、何度でも思い返すこの反芻行為こそ、重要であることが理解できる。不可知(わからなさ)の強調は、第二部以降は、回想する語り手のおこなう問い直しや自分の述べたことに対する反駁として現れてくることになる⁴⁵。

以上、現在形を通じた語り手のあり方への注意喚起が、不可知や不確かさという性質の強調に結びついていることを確認した。

ここまでⅢ. 1では、現在形の使用を中心として、この作品でいかに語り手の存在と語り手の位置する現在世界の存在が強調されているか、またそれが過去形で語られる物語世界といかに不可分の関係にあるか、そして余分にも思える語り手の存在の強調によって、読み手への訴えかけのほかに、物語行為を通じた回顧を絶対的な知とはせず問いかけの提示としてそれ自体の不確実性やものごとの本来的な不可知性が強調されていることをみた。

2. 一般的真理の現在形 [B]

『貧者の息子』では、非時間的な用法の現在形も多用されている。本稿ではⅡ. 2においてこれを[B]「一般的な真理の現在形」として項目立てた。これは一般性をもつ記述や、時間的に変化しない事柄についての情報提供の際に多く用いられる現在形の用法である。

フェラウンのこの作品はしばしば民俗誌的小説と評されるほど、カピリー地方のさまざまな地理・習俗・文化などの情報を提供する作品である。実際のこの作品は、フルルを主人公とした自伝的な枠組みをとってはいるが、語り手の個人的な生涯を描いた伝記小説というよりは、カピリー地方の生活や人びとのありようを描き出すことを主眼とする、共同体の自画像としての特質も顕著な作

品である。

カピリー地方の生活文化を紹介する叙述は基本的に、普遍的な真理・一般的な事実を表す（Bタイプの）現在形によっておこなわれている。作品の本文冒頭と言える第一部第2章はほぼ全面的に現在形を用いて、村のつくり、家屋の構造、人々の生活の特徴などが非時間的なスタンスで紹介されている。こうした部分に顕著であるように、現在形はこの作品で、現実世界に通じる事実説明のためにも多く使われている。

しかしこれは説明するまでもなくわかりやすい用法なので、以下には、こうした現実記述的な事実提示以外の、この作品に特徴的な現在形の一般的・普遍的な用法として、格言（的な一般論）の提示、人間をめぐる普遍的な議論の展開、さまざまな境界の超越と作品の諸場面への普遍的な広がりへの付与を検証し、さらにこうした一般性・普遍性への指向が、この作品においては、絶対的真理へとつながらないようにという配慮を伴っていることをみる。

1) 格言的な一般論の頻出

では最初にカピリー地方の言い回しがいろいろ紹介されていることを見てみよう。

- (30) Elles [= habitations prétentieuses] méritent le dédaigneux dicton qu'on leur applique: « Ecurie de Menaël, extérieur rutilant, intérieur plein de crottins et de bêtes de somme. » (p.13-14)

「それら [= 気取った構えの家々] はみんなが馬鹿にして言う、「外は金ぴか、でも中は糞と家畜だらけの、ムナイエルの厩舎」という文句がぴったりだ。」(17頁)

- (31) Seulement, il y a toujours des querelles des brouilles passagères (...) « Nous sommes voisins pour le paradis et non pour la contrariété. » Voilà le plus sympathique de nos proverbes. Notre paradis n'est qu'un paradis terrestre, mais ce n'est pas un enfer. (p.14)

「ただことあるごとに口喧嘩やささいな騒動が起きる (……)。『静いでなく、幸い運ぶ、ご近所づきあい』。われらの一番すてきな言い回しだ。この幸いがもたらす楽園とは、天国ではなく地上の園にすぎないが、それでも地獄ではないことはたしかだ。」(18頁)

(32) « Le cœur va où on l'oriente », dit un proverbe kabyle. C'est pourquoi les gens de bonne famille n'orientent le leur que vers le chemin de l'honneur. (p.170)

「カピリーの諺には、「心のゆくえは心がけ次第」というのがある。だからカピリーのまともな家の人間は、名誉だけを心がける。」(194-195頁)

格言というものはもともと、動詞を伴わない表現であるか現在形の動詞を用いた一般的内容の言説であるが、この小説ではそれらを提示する周囲の文章も上の3例に見られるとおりに現在形に置かれていることが多い。そのために、こうしたカピリー地方に古くから伝わる格言は、今なおカピリー地方に共有されているものとして示され、超時間的な性質が強く含意される。

また上のような既存の格言の引用というスタイルでの提示に加え、マチュー=ジョブが強調するように⁴⁶、この作品ではカピリーの人々の生活文化を基にしながら、より普遍的な格言や人間をめぐる一般論がしばしば導き出されていることにも注目したい。マチュー=ジョブは、この作品の初版を直接手にすることはできなかったものの、その内容をほぼ忠実に再現したアルジェリアのENAG社刊行のテキスト(2002年)⁴⁷にもとづいてこの作品の特徴を詳細に分析した。彼女の著作は、スイス版に依拠せずフェラウンの仕上げたオリジナル版の内容をもとにこの作品を検討した初めての研究であり、また、高度な文学性をもった作品としてこの小説を検討している点でも画期的な研究である。マチュー=ジョブはこの小説のなかにより普遍的な人間一般に関わる命題を述べるといった文章が散見されることに注意を向け、作者を人間についての普遍的真理を語る「モラリスト」の系譜に位置づけている⁴⁸。

たとえば次の(33)は、叔母たちによるカピリー地方独特の土器づくりを描写するくだりで現れる文章、(34)は進学の夢をあきらめたまさにその時にフルルへの奨学金授与と町の高等小学校への受け入れの通知が届いたというエピソードで現れる文、(35)は師範学校を卒業した後の感慨を記したくだりの文章である。それぞれ、格言・真理の現在形を語り手が使用した典型的な例であろう。

(33) Tant il est vrai que ce que nous réalisons est toujours le miroir de ce que nous sommes. Du reste, ce miroir ne reflète pas tout. (p.52)

「物は作った人を映す鏡だ、とはまことに真実である。といっても、この鏡はすべてを映し出すわけではないのだが。」(63頁)

- (34) C'est ainsi que le hasard aime à éprouver les bonnes gens. (p.138)

「まさにこんな風に、偶然はよき人々を試すのを好むのだ。」(157頁)

- (35) Les temps révolus ne reviennent plus. L'esprit transforme, le cœur change, le passé s'estompe. (p.161)

「過ぎ去った時はけっして戻らない。考えが変化し、気持ちも移り変わり、過去はかすんでいくものだ。」(184頁)

場面状況に応じて語り手が適宜、人間一般に通じるような格言的な言い回しを援用していることがみとれる。そして(33)の例のように、いったん一般論を提示すると、それがしばしば別の見方からまぜっかえされるのもフェラウンの特徴である。なんらかの格言・真理を絶対化しないような配慮をするのが、相対主義を重んじるこの作品の特徴的な傾向だと言える。この点については以下の4)でさらに見ることにする。

2) ローカルな物語内容から普遍的な人間論へ

本稿で注目したいのは、上の諸例からすでに読みとれるように、語り手が物語の内容を展開するなかでそれと相関するかたちで新たな人間論を案出していることである。

たとえば、祖母が亡くなったあと、大家族が分裂し、伯父の一家とフルルの一家が別々に世帯をもつようになった経緯を語る過去形の物語叙述の文脈のなかに現れる(36)の文章では、現在形による語り手の評釈的な説明を経て、普遍的なテーゼが提示されている。

- (36) Maintenant que l'irréparable est consommé, on dirait que tous le regrettent un peu. Mais ils ne regrettent que dans la mesure où c'est justement irréparable. « Je te pardonne à la charge que tu mourras », dit Géronte à Scapin. Donc les invitations s'espacèrent, (...) (p.70)

「取り返しのがつなくなつた今になって、みんな少し後悔しているみたいである。しかし後悔に酔うのは、まさに取り返しがつかないからに

ほかならない。「おまえが死んでからなら、赦してやろう」とジェロントがスカパンに言うとおりで、というわけで招き合うこともだんだん減ったし、(……)」(81頁)

下線部が語り手による説明のなかでも、より一般的な性質をもつ命題の提示部分である。ここではそのあとに、モリエールの『スカパンの悪だくみ』からジェロントの台詞が引用されているように、カピリーの一家族の生活形態の変容とともに生じたそのメンバーの心理やふるまいが、人間一般の真理を突く例として据えられていることがわかる。引用末に見てとれるように、この後は再び過去形による物語叙述に戻るが、この作品は、ストーリーを提示しながら、ことあるごとにそこからより普遍的な考察を導き出そうとする姿勢を顕著にもっている。

フェラウンはカピリー地方の生活をこの作品で描き出しているが、この地方をまったく特殊なものとして示そうとしているのではなく、(36)の例からも読みとれるように、カピリー地方の人間社会を強い独自性と固有の歴史や条件を有しながらも、ヨーロッパなどそれ以外の世界とも通じ合うものとして捉え、そうしたものとして提示しようとしている⁴⁹。フェラウンは、カピリー人が「ふつうの人間」であること(作品中にも「彼らは人類のそれ以外の人びとと相似している」⁵⁰という表現がある)、そしてカピリー人をもとに人類全体の諸特質を議論することができることを、みずからの書く文学テクストのなかで実証しているのである。

かくしてヨーロッパの文化とカピリー地方の文化や人間のありようは、しばしばあえて地続きのものとして示される。つまり一般的な真理の提示は、ヨーロッパ世界と現地民の世界の境界を取り払う機能も果たすのである。以下の(37)は、フルルが町の高等小学校に進学すると同時に住むことになったプロテスタント宣教師の慈善施設である学生寮で初めて知ることになった「ボーイスカウト」(むろん英国発祥の、そしてフランスではとりわけプロテスタント教の推進する活動)なるものについての記述である。また(38)は生徒間の差別意識が薄いと言われるアルジェの師範学校で、さまざまな基準によるそれぞれ排他的なグループがいろいろな模索を経て形成されることを述べたくだりが出てくる、明らかにキリスト教会をモチーフにした格言を援用した文章である。

- (37) Quant à la théorie, à la morale, aux différents articles de la « loi de l'éclaireur ». C'était inattaquable. Mais n'importe quelle morale est inattaquable. (p.143)

「『ボーイスカウト憲章』の理論や教訓やさまざまな条項はどうか。それらは非難の余地のないものだった。しかし、教訓というものはいかなるものもみな非難の余地のないものである。」(168頁)

- (38) La race ne réussit pas plus que le clocher à rassembler ses gens. (p.164)

「教会の鐘が必ずしも信徒を一堂に集められないのと同じで、人種もうまくはいかない。」(187頁)

この作品が、カピリーのな要素のみから人間論を展開するのではなく、登場人物が触れる機会のあるものであればヨーロッパ起源のものからも自分やカピリー人を含めた人間一般に通じる格言的な真理を汲み出そうとしていることが(37)に見てとれるし、(38)からは、自分の吸収した知識であれば故郷の伝統に由来するものであろうとフランスなどヨーロッパに由来する、おそらくはフランス語の書物で学んだものであろうと、分け隔てなく、そして抵抗なく自分の考えの展開に援用する(べきだ)という作家フェラウンの姿勢が読み取れる。複数の文化的起源のあいだで引き裂かれることのない多元的な主体の肯定や、対立と占有に結びつくセクショナリズムへの抵抗がここにも示されていると思われる。

マイノリティに対する差別とは、みずからが優位に立っていると思っている人びとが直接的に軽蔑的な姿勢や発言を他者につけることに存するのではなく、周縁的とされる人びとには、その人びとのあり方を基にして人類全体におよぶ特質を演繹することが禁じられていること、この意味で人間性のありかとして据えられることから排除されていることに存すると言われる⁵¹。まさにこうした状態に、植民地支配下のカピリーの人びとは置かれていた。カピリーの人びとは被植民者であるアルジェリアの「原住民」(その大多数は「アラブ人」)のなかでもさらにマイナーで野蛮な遅れた「人種」として、問題視され、あるいは憐れまれ、また外部(フランス国家とフランス人)から見た彼らの有益性についての議論が華やかに展開され、彼らはいつの日か文明人になりうる存在であるとの説が大真面目な称賛として重ねられていたのである⁵²。フェラウンはこうした状況にあって、カピリーの人びとがすでにして十分に人間的な存在

であること、そしてカビリー人をもとに世界中の人びとの人間性をも議論できることを小説として証し立てようとしたのである。

ところでマチュー＝ジョブが述べているように、この作品の人間に関する一般論にはとりわけ人の生死をめぐる言説が目立つ⁵³。

- (39) *Ceux qui doivent en mourir en mourront.* (p.194)

「それで死ぬことになっている者は、それで死ぬだけだ。」(222 頁)

- (40) *Pourtant les Kabyles ne se plaignent plus. Il arrive un moment où le malade se rend compte que sa souffrance a atteint son plus haut degré. S'il ne se meurt pas à ce moment précis, c'est fini. Le mal ne peut plus que diminuer, diminuer jusqu'à la guérison.* (p.195)

「だが、カビリー人はもう嘆くことはない。病気に罹った者はやまを越えたことを自分で悟る時があるものだ。その時点で死に向かっているかっただらもう大丈夫だ。あとは良くなっていくだけで、だんだん良くなり最後には回復するのだ。」(224 頁)

またエピローグに書かれた次の文章は、まさにこの作品の意義を作者がふりかえって人間の生死について論じたものである。

- (41) *Peut-être qu'au fond l'existence est beaucoup plus simple qu'il ne croit. Pour les gens de chez lui apparemment, le problème n'a rien de troublant: il s'agit de vivre le mieux possible. La mort surprend toujours ceux qu'elle frappe parce que tous ne songent qu'à la vie. Ils sont entièrement absorbés par leurs affaires, leurs intrigues, leurs ruses.* (p.198)

「もしかしたら本当は、人間の存在というものは、フルルが考えているよりもはるかに単純なのかもしれない。彼の郷里の人たちにとって、問題は悩みの種にはならない。なるべく良い人生を送りたい、それだけだからだ。たしかに死は突然襲いかかってくるが、逆に言えば、それだけ人はみな生きることに懸命だということだ。誰もが自分の日々の務めや、さまざまな迷惑や、あるいはつまらぬ魂胆に没頭して暮らしている。」(231 頁)

フェラウンが地上に生きるすべての人びとを念頭に、まさしく万人の条件である死を見据えながら人の生をめぐる思索を繰り広げたのがこの小説にほかならないこと、しかもそれをみずからの環境を出発点としておこなうことがこの小説のねらいにあったことを、このエピローグのくだりは語っていると思われる。

3) onの活用——場面をもとにした一般論の提示

ここでさらに『貧者の息子』のテキストの目立った特徴の一つであるonの多用についても触れておきたい。マチュー＝ジョブらも取り上げているように⁵⁴、この作品では実に頻繁にonが用いられている。第一章第2部などのカビリーの生活文化一般の紹介で濫用されるほか、多彩な用いられ方をしている。

一般に、主語として用いられるフランス語独特の不定代名詞onは「人、人びと」を表す普遍的な意味で用いられたり、あるいはnous「私たち」やje「私」あるいはils「彼ら」やvous「あなた、あなたがた」の代わりに用いられたりすることができる。onの機能と特性について興味深い研究をおこなっている小田淳⁵⁵は、田口紀子⁵⁶らの説を引きながらonには「人称の中和」の機能があることを述べている。すなわちほかの主語を用いれば生じてしまう1人称・2人称・3人称という人称間の対立が、onを主語に立てるときには解消されるのである。まさに『貧者の息子』では、家族や村の人びとあるいは逆にそれと対立する立場にあるものとしてのフランス人やヨーロッパ人、またフルル自身についてonを用いた表現がなされるだけでなく、onという表現を通じて、それらが曖昧に融合した定義し難い共同的な主体が素描されている。こうした仮構的な共同体の創出については次稿で自由話法を論じてテキストにおける主体性の問題を扱う際に再び触れることにしたい。ここではonが格言や一般論とつながるケースのみ確認しておこう。

誰を指しているのか明確に突き止めることのできないこの不定代名詞onの使用を通じて一般論が提示されている例は『貧者の息子』においてしばしば観察される。上のⅢ. 2. 2)で論じてきたのと同様に、これらもなんらかの具体的な状況の叙述のなかから引き出される、あるいはその文脈にかかわるものとして提示される一般論である。格言に近い例を挙げてみよう。onをイタリック体で強調しておく。

(42) *On ne sait jamais ce qui peut arriver.* (p.117)

「まったく何が起きるかわからないものだ。」(134頁)

- (43) Toutefois, *on ne peut jamais aller au-dehors du mektoub*. (p.153)
「しかしながら、人は定められた^{メクトゥーフ}運命を超えることはけっしてできない。」 (174 頁)
- (44) *On a beau parler de n'importe quoi et n'importe comment, on n'est jamais totalement médecin*. (p.198, épilogue)
「人は好きなことを好きなようにしゃべることができるが、どのみち完璧な医者⁵⁷になどなれない。」 (231 頁)

言うまでもないが、動詞時制は非時間的な用法の現在形に置かれている。on のこうした使用によって、物語が語る特定の状況を出発点として ((42) (43) の例)、あるいは語り手自身をめぐる省察を土台にして ((44) の例)、人間一般に通じるような寸言が、語り手によるコメントのかたちでテキストに織り込まれているのである。フェラウンの文学を総合的に論じたエルバズとマチュー=ジョブはこれをフェラウンの有する「普遍化主義」*universalisme*と呼んでいた⁵⁸。

格言がカピリーの人びとの言葉として紹介されつつ強く一般性をもっている例も挙げておこう。引用中の格言的な部分に下線を付す。

- (45) *C'est une loi divine. Chacun de nous, ici-bas, doit connaître la pauvreté et la richesse. On ne finit jamais comme on débute, assurent les vieux*. (p.18)
「それはまさに神の掟なのだ。地上に生まれた者は誰も貧しさと豊かさの両方を知らねばならない。年寄りたちは言う、初めと終わりが同じことは決してない、と。」 (23 頁)

この (45) はカピリー地方の「貧しい」生活ぶりについて説明した部分のまとめとして記されいる文章であるが、単にこの地方の老人たちの台詞を紹介したのではなく、引用の冒頭「それはまさに神の掟なのだ」にも明らかなように、「地上に生まれた者」すべてにかかわる命題がカピリーの状況から引き出されているのである。

『貧者の息子』でのこうしたonの使い方が、この不定代名詞本来の特質に合致したものであることがさきの小田の論文で確認できる。小田はonについて、

「あらゆる人間を対象として客観的または普遍的な真理（あるいは理想）を述べるために使われる」実例はそれほど多くないとして、話し手や語り手の主観や世界観にもとづいて個別の状況から一般論が引き出されている例を4つほど示している。そしてそれらの例が「現実の個別の場面・状況が引き金となって、話者がその個別の状況・事実などを正当化するための一般論を述べるために（あるいは話者がそこから導き出した一般論を述べるために）使われることが多いようである」と述べている。なお小田が挙げている例には『星の王子さま』（発表1943年、フランスでの刊行は1946年）からの引用があるが⁵⁹、実は『貧者の息子』にはサン＝テグジュペリのこの作品との類似点がさまざまに指摘できるように思われる。執筆時期から考えてその直接的な影響はあったとしても限定的なものかもしれないが、単純にみえる物語から人間論を抽出すモラリスト文学としての特質は両作品の類似点の一つであろう。

そもそも現在形による真理・格言の提示が、まったく「普遍的」な発言ではないことを、本稿Ⅱ.2で取り上げた論文のなかで小熊和郎も指摘している⁶⁰。「水は100度で沸騰する」という命題ですら、それを発話するときには背後に「ある時代のある共同体の話者が共有する知識」が存在するのである。そして格言や一般的真理の発話は「真空状態に生まれるのではなく」、発話者の位置している「具体的状況が直接的には引き金となり、その状況を説明したり描写する発話」だと小熊は説明する。小説における真理や格言の提示は、まさに具体的状況との「シンクロ」と、別の任意の状況（たとえば読み手の置かれている状況や、読み手が想像する状況）への「交換可能」性の両方を特質としていると言えるだろう。

以上に確認したように、onおよび現在形のもつ一般化の機能、すなわち通常設定されている認識の境界を超越する機能は、個別具体的な状況を出発点としながら発揮されるものである。検討した諸例から明らかなように、『貧者の息子』は現在形とonのこうした特性をこのうえなく活用したテキストであると見ることができる。

4) 真理の反転——フェラウンの相対主義

もう一つここで強調しておきたいのは、すでに触れたフェラウン独特の徹底した相対主義の姿勢である。一般的真理や格言についてもそれがこの作品で提示されるときには、反語的な用い方をされていたり、異なる見方がすぐに付加されたりすることが多い。その例はⅢ.1.3)でも確認してきた。また今Ⅲ.

2. 2) および 3) で論じたように、真理に類する一般論が、それを生みだす具体的な文脈と完全には切り離されないうちで提示されることもこの作品の特徴であり、こうしてこれらの「真理」が——ほかの人物にも応用可能なものでありながら——ある場所と時間と状況との制約と無縁ではない、したがって絶対的なものではないことがたえず示されているのである。単にフェラウンは「普遍化主義」的傾向があると指摘したのでは見落とされがちなこうした特質に注意したい。

フェラウンは究極の真理、唯一絶対の価値観というものに真っ向から否定的な作家であると思われる。この点は注意深く検証していくべきことではあるが、『貧者の息子』においても、まさにあらゆる箇所で、ものごとの多面性や多元的な価値観が強調されている。そのために、テキストの叙述に生じる逆接的展開が過剰なまでに複雑になることもときにあるほどである。一般論や「真理」についても、すでに触れたように、フェラウンはそれを提示するや否や、反論を加えたり、別の見方を足したりせずにはいられない。したがって相矛盾するような複数の「真理」が次々と並列されていくといったことが起きる。以下に一つだけその典型的な例を見てみよう。

第二部第7章の、師範学校入学試験の合格発表の場面である。「原住民」にとって師範学校是最難関であったが⁶¹、自分がその数少ない合格者であることがわかり、フルルは歓喜に酔う。なお以下の引用において、分析の必要に応じて文中に参照番号を付す。

- (46) [1]Quand on nage dans une joie pareille, on doit pouvoir s'envoler, par exemple. Or, il vit bien qu'il ne pouvait pas voler. La joie le remplissait en entier, l'étouffait, débordait hors de sa personne. Il s'en apercevait. Son corps le gênait comme un vêtement trop serré. Il aurait voulu s'en débarrasser [2]tant il est vrai que la faible nature humaine est aussi incapable de supporter une grande tristesse qu'un plaisir extrême. Il avait lu, on lui avait souvent dit que [3]le bonheur parfait n'existe pas en ce monde. [4]C'est peut-être à cause de notre faiblesse. (p.155-156)

「[1] これほどの喜びに浸っている時には、たとえば空を飛んでもおかしくない。 でも、どうやら飛べないことは間違いなかった。歓喜が身体じゅうに満ちわたり、それで窒息しそうなほどで、自分の外にまで溢

れ出していた。それがよくわかった。きつい服みたいに自分の身体が窮屈に感じられた。脱ぎ捨ててしまいたいような気持ちだった。[2]人間というのはそれほど弱い生き物で、大きな悲しみにも、極度の喜びにも耐えることができないのである。[3]この世には完璧な幸福は存在しないと本でも読んだし、よく人からも言われてきた。[4]おそらく、それは私たちの弱さのせいなのだ。」(177頁)

下線で示したように、ここにはいくつかの格言的な言説が提示されている。まずフルルの喜びをきっかけとして、一般論として、またおそらくは喜びに包まれているフルル自身の考えたテーゼでもあるものとして[1]が示されている。これは無上の喜びのために空にも舞い上がるほどの歓喜を当然とする主張である。そのあと、むろん空を飛ぶことはできないこと、爆発しそうな喜びのあまり自分の体を窮屈に感じるフルルの姿が描かれ、極限的な悲しみと同様、あまりにも大きい喜びには「耐えられない」人間の弱さが[2]で命題化されている。この[2]では喜びがむしろ苦痛に近いものであることが述べられている。さらに[3]ではこれを受けて、世間にすでに存在する知として、地上の人間にとって完璧な幸福はありえないという説が提示される。すなわち完璧なほどの喜びは、その強烈さゆえに完璧ではありえない、人間がなんらかの感情の純粹な絶対性に至ることはないという命題が引用されている。そして、偶有的な現実世界における「完全」の不可能性についての議論とも受け取れるこの一般的命題から、[4]では「おそらく」で示されている通り、語り手の思考として、喜びの不可能性を、人間の本来の弱さあるいは欠陥という特質に結びつける論が提示される。このようにこのくだりは、あまりに複雑な論理展開をおこなっており、ほとんど悪文に近いと言ってもよいかもしれないものである。この例のように『貧者の息子』では、出来事から一般論が敷衍され、さらにそこから別の一般論が呼び起こされ、思考が思考を生みだして、とどまることなく展開していくことがしばしばある。単に混乱した文章だと受け取られることも、あるいは複雑な逆接や転換がおこなわれていることに読み手が気がつかないで読み過ごしてしまうことも多いと思われる。ただこうした語り方がむしろ作家の拘泥した叙述法であり、ここにこの作家特有の思考と論述の精妙さを見ることも可能であると思われる。

引用(46)の内容にも目を配っておきたい。このシーンでは喜びの絶頂が、人間にその本来のなもろさや哀しさを鋭く経験させる機会へと反転されてい

る。そしてこのように思考の紆余曲折を経て提示された [4] の人間の弱さをめぐる議論は、この文だけを取り出した場合に受け取られるような人間の脆弱さについての単純に否定的な見解ではなく、喜びの頂点において露呈するような弱さという本質こそが、人間のより繊細で、ある意味で洗練された感情のメカニズムを作り出しているという主張になっている。作品冒頭で、フルルが思弁を弄する (philosopher) ことのできない人間で、それはみずからの「弱さ」を自覚しているからであることが述べられていた⁶² ことにも顕著なように、絶対的なものを志向せず、またそれに耐えることもできないこの人間の「弱さ」はこの作品の主題そのものである。矛盾したさまざまな思考と、感覚や感情を十分に重んじた省察をもとに、欠陥を本来的に抱えた人間の姿をいとおしいものとして、また尊重すべきものとして描き出すことが、この作品の基本姿勢であると思われる。

以上、このⅢ. 2では、この作品における語り手のコメントとしての現在形のなかでも非時間的な用法を通じて一般論や格言的な文の提示が頻繁におこなわれていることをみた。とりわけ、作品の提示する特殊的な状況と一般性との接続をその特徴として指摘するとともに、一般論を究極の絶対的真理として提示するのではなく、この作品では格言的なテーゼも多くの場合相対化され、テクストが柔軟な問いかけをおこない、複雑な多元的認識を掘り下げる契機とされていることに注意を向けた。

3. 物語叙述の現在形 [C]

最初に述べたように、物語叙述に現在形を多用することが、この作品の語りの最も顕著な特徴である。

一般に「語りの現在形」le présent narratif (本稿では「語り手表出の現在形」と明確に区別するために「物語叙述の現在形」と称する) はそれ自体が規範に対する逸脱として位置づけられ、ふつう例外的な叙述法とみなされる。英語に比べてフランス語の方が「物語叙述の現在形」の許容度が高いものの、それほど長く続くことのない、一時的な現象として現れることが多くの研究で確認されている。この作品でも、まず過去形を用いた物語叙述の文脈のなかで「物語叙述の現在形」への移行が起きることは他の小説と同様である。しかし、それがきわめて頻繁に起きること、またかなり長く続くことも多いこと (数段落に及ぶこともある) が『貧者の息子』の顕著な特徴である。そして、「物語叙述の現在形」が長く用いられ続けるくだりにおいては、現在形の使用が例外的逸

脱ではなく、それ自体が基本的な物語叙述態勢の感を呈することになる。

以下にはこの作品の理解にとってきわめて重要な現在形の物語叙述の特質を検討していきたい。

1) 眼前描写の機能の拡張と語り手の位相

一般に「物語叙述の現在形」の機能は、臨場感を高めるもの、ないし読み手にとって今眼前で物語世界の出来事が起こっているような印象を生み出し、叙述に生彩を与えるものとして説明される。たとえば最も参照される文家のグレヴィスは、物語で用いられる「歴史的（ないし語りの）現在」le présent historique (ou narratif)（本稿で言う「物語叙述の現在形」）について、「それは、物事が過去のものであっても話している今生起しているような印象を与え」、「格別に生き生きとした」印象をもたらすとしている⁶³。そこでまず、ふつう「眼前描写」と言われるこの最も代表的な用法が『貧者の息子』ではどのように生かされているかを見ながら、この種の現在形について一步踏み込んだ説明をしている先行研究をもとに議論を深めていきたい。

次々と物語世界の事柄が現在形で告げられていく点で典型的な「眼前描写」タイプの現在形による物語叙述の例をまず見てみよう。下の(47)は、学友アジルとともに猛勉強にいそしんだ高等小学校での生活について述べたくだりであり、その前の段落では過去形を用いた物語叙述がおこなわれていた部分である。引用中、物語叙述の現在形に下線を付す。なおこのくだりについてはスィユ版もまったく変更を加えていない。

- (47) Oh! les longues nuits d'hiver. Ils se les rappelleront toujours. La maison est plongée dans le silence. Dehors, le vent souffle, la pluie crépète sur les toits. Tout dort. Seule, par les interstices des volets, leur chambre laisse filtrer une faible lueur hésitante. C'est la bougie qui brûle. Ils sont sur leur chaise, enveloppés dans leur burnous, devant leurs cahiers ouverts, l'un en face de l'autre. Ils ne parlent pas. Ils lisent. Ils luttent contre le sommeil. (p.149)

「ああ！冬の長い夜。二人はこれからも一生忘れることがあるまい。館じゅうがひっそりとしている。外は風が吹き、雨が瓦を打って音を立てる。すべてが眠っている。ただ二人の部屋だけが、罅戸の隙間から頼りなげな弱い明かりを漏らしている。ローソクが燃える灯だ。二人

^{ブルース}は外套にくるまって椅子に座り、差し向かいで、それぞれ開いたノートを前にしている。二人はしゃべらず、じっと本を読んでいる。眠気と闘っている。」(169-170 頁)

第3文の La maison est 「館じゅうが」以降が眼前描写タイプの現在形物語叙述である。接続詞も用いず、語り手による説明もほとんどなしに (Seule 「ただ」がその例外であろうか) 多くは短い文章で事態が語られており、典型的な例だと言える。しかしこの例でもすでに、物語叙述における現在形の使用が単なる眼前描写ではないことが明らかであることに注意したい。すなわちこの例では、現在形の物語叙述がいわゆる「実況中継」的に過去のある状況を伝えているのではなく、反復されておこなわれた事柄を一回の叙述で (ジュネットの言う「括復法」で) 浮かび上がらせているのである。それでいてこれらの現在形には、読み手が眼前にその光景が繰り広げられているのを見るかのような生き生きした臨場感をもたらす効果があり、過去時制であれば半過去形が担う慣習の表現と、単純過去形が得意とする一回きりの出来事の継起的な記述の両方をおこなっているように思われる。反復的な事柄についての叙述でありながら一回的な場面喚起の側面をもつこのくぐりには、ジュネットが『物語のディスクール』で論じたブルーストのテキストに特徴的な (半過去形の使用による) 「疑似括復法」⁶⁴ (括復法の体制のなかでいつのまにか一回きりの場面を語る語り方) と相似的であると思われる。本稿のⅡ. 2. では現在形が「カメレオンの」に広い用法を許容することを確認したが、(47) の例は、反復的か点的叙述かといった区分を消去する、小熊の言葉を借りて言えば現在形のまさに「不定性」が活用された語りの事例であると見ることができる。

なおこの (47) の例では、前の段落の過去形による物語叙述から、ここでの現在形の物語叙述への移行をスムーズにするつなぎとして、言い換えれば現在形の物語叙述を発動させる「トリガー」⁶⁵として、語り手の主観的なコメント (Oh! les longues nuits d'hiver. 「ああ! 冬の長い夜。」) と、語り手の現在時を基準にした付加的説明 (Ils se les rappelleront toujours. 「二人はこれからも一生忘れることがあるまい。」) が用いられていることに留意しておこう。現在形による物語叙述への移行をスムーズにするためのこうした手立てについては、以下の3) で改めて取り上げることにする。

物語叙述の現在形が単なる眼前描写と異なる特質を有していることについてさらに議論したい。現在形による物語叙述はその背景として過去形による物語

提示がすでにおこなわれているなかで出現する。したがって物語世界の全体を見渡す俯瞰的な視点があらかじめ設定されている。そのうえで目の前で展開するかのよう到来事を語っていくのがこの叙述法なのである。実況中継に用いられるフランス語の現在形について論じた岸彩子は、純粋な眼前描写すなわち今日の目で初めて生起している出来事を伝える「実況中継」とは異なる性質をもつものとして、「リプレイ、録画、試合報告」の事例に注目し、この項目を立てて事例を分析している⁶⁶。物語叙述の現在形は、本物の実況中継ではなく、このリプレイや録画を解説する発話、あるいは昼間におこなわれたスポーツの試合の報告をその日の夜のテレビニュースなどで臨場感を込めて報道する場合（試合報告）ときわめて近い特質をもっているのではないだろうか。岸はこのタイプの現在形について、まさに起こりつつあることを報告する「実況中継」の現在形とは異なって、puis「そのあと」といった接続詞やquandを用いた節と共起可能であること、また客観的な時間表現（「前半27分に」など）とも共起しえることを指摘している。本稿では以下の(50)冒頭のPendant ce temps「その間」や(52)の第2文に現れるAlors「そのあとで」を、こうした俯瞰的立場からの接続表現が、次々と継起する出来事を語る現在形と共起した例として指摘したい。また岸は、リプレイの説明では出来事の全体像がわかっているので（このプレー中）「2回パスした」のように総計数に言及することも可能なことを例を通じて示している。こうした総括的な視点と眼前描写の共存こそ、物語叙述の現在形の特徴にほかならないことを本稿では強調したい。さきに見た(47)の引用文で始まって以後現在形が続く段落の最後の部分を以下に引用する。俯瞰的立場が全体に読みとれるが、それがとりわけ明らかに反映された語句に下線を付した。

- (48) Durant quatre ans, ils ne se sont jamais rendus en classe sans être sûr d'eux-mêmes sans avoir sur le bout des doigts la totalité de leurs leçons. Plus tard, lorsque Menrad sera à l'École Normale et qu'il ne pourra plus fournir le même effort, il s'apercevra avec stupeur que bien souvent il s'était dépensé inutilement (...) (p.150)

「四年のあいだ、二人は一日も欠かさず、習っている課を隅々まで理解し尽くし完璧な自信を携えて教室に行ったのだった。のちにメンラドは、師範学校に入り同じだけの努力がもうできなくなった時、自分がいかに無駄な努力を費やしてきたか（……）に気づき、我ながらあき

れ返ることとなる。」(170頁)

第一文では過去と現在をつなぐ複合過去形が用いられ、下線で強調した「四年のあいだ」「一日も欠かさず」という俯瞰的総括の視点が、(48)の引用に入るまでの現在形の物語叙述のくだりとの接続を違和感のないものになっている。ここでは、現在形で表現されてきた反復的行為のおこなわれていた期間が「四年」として示される一方で、この高等小学校時代の時点を起点として、単純未来形を用いてその後のフルルの経験すなわち師範学校に進学した後の事柄が予見的に記されている。こうした未来の先取り(ジュネットの言う「先説法」)との連接が示しているように、物語叙述の現在形は、そのあとの事情がすでにわかっているうえで用いられる現在形なのである。

文学作品における物語叙述の現在形がこのように俯瞰的視点を本来的にもつものであることに注目したのは橋本陽介である⁶⁷。橋本は、競馬のレース回顧の報道、あるいは目の前にある写真や映像を見ながらそれについて語る場合や、資料を参照して語る場合、さらにはあらすじなどにおいて現れる現在形を分析し、それが小説における現在形を用いた物語叙述と本質的に類似していると考えている。物語叙述の現在形の場合もそれらの事例と同じく、語る対象の全体像をすでに把握していながらあえて目の前に展開されるものとして現在形で語るというのが、橋本の議論の基礎的な考えである。過去形を用いて語り手が一定のポジションから回顧的に物語するというモデルに従う欧米の一般的小説の場合でも、語り手は物語世界から延びる時間軸の延長上にはいるのではないとされる。とりわけ興味深いのは、眼前描写のかたちで、物語内容に対して同時点のスタンスから語り手が物語内容を語る場合にも、語り手は、同時的ではあるが別次元のある場所に位置しているという橋本の理解である。この語り手のあり方を、橋本は「脱同一時間軸化」と呼んでいる⁶⁸。語り手は、物語内容が展開する世界の外から(ある別次元の場所から)、ただし同時的な見方で、物語世界を眺めている、と橋本は主張する(そしてこれを「物語現在的語り」と呼ぶ)。橋本は、日本語と中国語はこの語り方を物語叙述の基本形としているとし、さまざまな事例を引証しながら詳細で体系立った議論を展開している。フランス語の場合この語り方が基本形ではないとしても、『貧者の息子』で大規模に見られるように、同時点的な視点を有しながら物語世界に対して距離をとったこの語り方が、部分的に採用されることはかなりあると考えられる。

さてこの橋本の主張どおり、物語叙述の現在形はけっして語る対象と同一時

点に語り手がいることを表現するものではないことについて、以下の例からも確認したい。とくにこの点は、『貧者の息子』の第一部での語り手が、語り手と語られる自分との距離を意識し、ことさらにその距離を明示することを特徴としていることから重要である。注目したいのは、現在形を用いている物語叙述のなかで大過去形が現れるケースである。下の(49)であるが、現在形に下線を引き、大過去形を太字イタリック体で示す。シーンについて説明しておく、喧嘩騒動のあとの事態收拾のために村のお歴々が訪問してくるのに備えてフルルの家では御馳走を準備し始めるという場面であり、(49)の第2文ではこの時点よりも一段階前の時点の出来事として、その朝フルルの父親が町までラバの背につけた籠にブドウを入れて売りに行ったことが言及されている。

- (49) Sous la direction de ma grand'mère, les femmes se disposent immédiatement à préparer un grand couscous. La vieille tire non sans orgueil, du chouari qui ***avait emporté*** le raisin à la ville, un grand chapelet de viande acheté par mon père. (p.41-42)

「祖母の指揮のもとに女たちはただちにクスクスの大鍋の準備にかかる。町までブドウを入れて**持って行った**振分け籠から、祖母は、ちょうど父の買ってきた肉の塊を誇らしげに**取り出す**。」(52頁)

現在形の記述を起点にして一段階前の過去の出来事を示すには、通常ならば、複合過去形が用いられるべきところである。しかし(49)では、動詞emporter「持って行った」が大過去形に置かれている。これは、基準となる叙述が過去の体制にあるという意識が横たわっているからである。ちなみにこの引用部についてはスイユ版もまったく同じ記述となっている。ここでの大過去形との共起から考えるのは、物語叙述の現在形は(時間軸上の関係を示す)時制としてその出来事が語り手にとって現在の事柄であることを表すのでも、また語り手が完全に出来事と同時点に移動してしまっていることを表すのでもなく、出来事が過去のことであるということを認識しながら、あえてそれを眼前展開のニュアンスを付与して提示するという機能を果たしている、ということである。

物語叙述の現在形の機能や使用条件についてはより厳密な検討が必要であると思われるが、ここでは、眼前描写の機能をもつこの現在形が、過去と現在の重層化を特徴としていることだけ押さえておきたい。すなわちこの現在形は、語る対象の出来事をすでに生起した過去のものとして俯瞰する語り手の位相

と、出来事を目の前に展開するかのように再現するという姿勢との、二面を備えており、これを多用する『貧者の息子』は、俯瞰と接近という二つの対象的な認識のベクトルを、双方ともに強化した物語世界を生み出しているとおきたい。

以上、物語叙述の現在形が、単なる眼前描写の機能を有するだけでなく、反復された事柄について叙述する場合にも用いられる「疑似括復法」的な使い方があること、過去のことを語るという意識と目の前のことのように示すという二重の意識の反映が明確に見られるケースがあることを指摘した。

2) 揺動的な叙述態勢——一貫した叙述態勢をとるスイユ版との比較

田原いずみは論文「語りの現在形についての考察」において、物語叙述の現在形が直接的な証言のニュアンスをもつことを説明した上で、それが使用される理由として「単純過去や半過去による冷静で淡々とした語りのトーンやリズムを一時的に壊し、語りがモノトーンになるのを避ける」といった理由を挙げている⁶⁹。一貫した語り方を好むか、変化に富んだ揺れる語り方を好むかは趣味の問題と言ってもよいもので、現在形を使った物語叙述のくだりを、継続・進展中のニュアンスの事柄は半過去形に、一つ一つ完了し、さらに次々と継起する事象には単純過去形を用いて書き直すことができる。実際、『貧者の息子』の初版からスイユ版への文面上の変更の主な点は、この動詞時制の書き換えである。多くは初版で物語叙述の現在形を使用した箇所を、前後の文脈に揃えて過去形で記述し、全体として揺れない、一貫した（田原の表現を借りれば「モノトーン」な）文体に仕上げるのである。なお、それでも、スイユ版の多くの箇所に、現在形による物語叙述が初版どおりに残されていることを付言しておく。

スイユ版で現在形の物語叙述が過去形に変更された例は枚挙にいとまがない。ストーリー内容としてはどちらでもほぼ同じ内容が読者に伝えられる。以下は第一部第8章からの一節で、章の冒頭から（語り手表出の現在形を別として）ずっと過去形で物語が叙述されてきた部分に現れる一節である。この(50)の部分は、フルルの祖母が亡くなったあと大家族が世帯を分けることになったことを語るくだりで、本稿で先に(36)として引用した、『スカパンの悪だくみ』を参照した一般的言説が現れる箇所を含んでいる。以下の(50)全体をみると、物語叙述に用いる時制の揺れを顕著に読みとることができる。台詞の引用の部分を除いて、現在形（および語り手のコメントをあらわす点で

現在形と同様のモードを示す条件法現在形) に下線を引き、過去形(単純過去形および半過去形)をイタリック体にして示す。なお訳文は動詞時制をなるべく反映したものに調整したため、(36)での訳と若干異なる箇所がある。

- (50) [1]Pendant ce temps, les deux frères seuls restent mélancoliques. Il leur semble déjà sentir sur leurs épaules désunies, le poids doublement accru de leur charge. Ils pressentent que l'avenir ne leur réserve rien de bon, qu'ils viennent de s'appauvrir et que chacun d'eux vient de perdre la moitié de ses forces. [2]Les premiers jours qui *suivirent* le partage, ils *prirent* plaisir à s'inviter. Mon oncle m'*appelait* à chacun de ses repas. Helima, elle-même, *se surprenait* à vouloir gâter Fouroulou. [3]Maintenant que l'irréparable *est* consommé, on dirait que tous le regrettent un peu. Mais ils ne le regrettent que dans la mesure où c'*est* justement irréparable. « Je te pardonne à la charge que tu mourras »⁷⁰, dit⁷¹ Gêronte à Scapin. [4]Donc les invitations *s'espacèrent*, les anciens griefs *reprirent* le dessus auxquels *vinrent* s'en ajouter d'autres provenant de notre voisinage au dedans et au dehors, puis les jalousies. (p.69-70)

「[1]その間、兄弟二人だけが憂鬱に沈んでいる。離ればなれになったそれぞれの肩に、二倍に膨らんだ重荷がのしかかってくるのを早くも二人は感じとる。この先良いことは何もなく、すでに貧乏への転落が始まっているように、そして二人とも、自分の力の半分を失くしたように感じている。[2]家を分けたあとに最初に訪れた何日かは、互いに招き合う楽しみを満喫した。伯父は食事のたびに私を呼んだ。ヘリマでさえ、フルルをかわいがりたい気持ちに駆られたことに自分で驚いていた。[3]取り返しがつかない今になってから、みんな少し後悔している みたいだ。しかし後悔に酔うのは、まさに取り返しがつかないからにほかならない。「おまえが死んでからなら、赦してやろう」とジェロントがスカパンに言うとおりだ。[4]というわけで招き合うこともだんだん減ったし、以前の不満がまた頭をもたげてきた。そこへ家に居ても外に行っても隣り合わせになることからくる新たな不満が、さらに嫉妬が加わった。」(81頁)

フェラウンがしばしば物語叙述を現在形でおこなうのは、フランス語力が足り

ず、たとえば単純過去の用法に習熟していないからだといった説明は不当であることがまず確認できよう。この段落は現在形とともに単純過去形と半過去形による叙述も含んでおり、その部分の表現もきびきびと的確でなんら書き手の不自由を感じさせない。作品冒頭で大枠の語り手は適切な表現を見つけ出す苦勞を語りフランス語表現に関する不安を述べてはいるが、単純過去形など過去時制の使用についてはテキストを読むかぎり問題はない。そのことはもともと過去形で書かれた部分についてはスイユ版でもほとんど訂正がなされていないことから確認できる。なお、日本語では、初版テキストに忠実なかたちで動詞時制を現在形にして訳しても、不自然な印象は起きない。むしろ [1] 以下の登場人物たちの心の内を記述する現在形から、[2] 以下の少し距離を置いて出来事の進展を叙述する過去形へ、さらに [3] 以下の語り手の介入を通じて一般論を引き合いに出す現在形の部分を経て、[4] 以下のもう一度距離を置いて出来事を物語世界に定位して段落を閉じる過去形へという揺動的な語り方が、変化とニュアンスに富む魅力的な文学的叙述であると感じられるのではないだろうか。

一方、フランス語母語話者で、冒険小説・大衆小説などみずからも単純な書きぶりを好む作家エマニュエル・ロブレスが文面修正の多くをおこなったと推察されるスイユ版では、全体を統一して以下のように書き改められている。変更された箇所影をつける（以下同様）。

(50') 【スイユ版】

[1]Pendant ce temps, les deux frères seuls *restaient* mélancoliques. Il leur *semblait* déjà sentir sur leurs épaules désunies, le poids doublement accru de leur charge. Ils *pressentaient* que l'avenir ne leur *réserverait* rien de bon, qu'ils *venaient* de s'appauvrir et que chacun d'eux *avait perdu* la moitié de ses forces. [2]Les premiers jours qui *suiuivrent* le partage, ils *prirent* plaisir à s'inviter. Mon oncle m'*appelait* à chacun de ses repas. Helima, elle-même, se *surprenait* à vouloir gâter Fouroulou. [3]Maintenant que l'irréparable *était* consommé, on *aurait dit* que tous le *regrettaient* un peu. Mais ils ne le *regrettaient* que dans la mesure où *c'était* justement irréparable. « *Je te pardonne à la charge que tu mourras* », dit⁷² Géronte à Scapin. [4]Donc les invitations *s'espacèrent*, les anciens griefs *reprirent* le dessus auxquels *vinrent* s'en ajouter d'autres provenant de notre

voisinage au dedans et au dehors, **sans compter** les jalousies. (Seuil, p.60-61)

「[1]その間、憂鬱に沈んでいるのは兄弟二人だけだった。離ればなれになったそれぞれの肩に、二倍に膨らんだ重荷がのしかかってくるのを早くも二人は感じとった。この先良いことは何もなく、すでに貧乏への転落が始まっていたように、そして二人とも、自分の力の半分を失くしたように感じていた。[2]家を分けたあとに最初に訪れた何日かは、互いに招き合う楽しみを満喫した。伯父は食事のたびに私を呼んだ。ヘリマでさえ、フルルをかわいがりたい気持ちに駆られたことに自分で驚いていた。[3]取り返しがつかなくなった今になってから、みんな少し後悔しているみたいだった。しかし後悔に酔っていたのは、まさに取り返しがつかなかったからにほかならなかった。「おまえが死んでからなら、赦ゆるしてやろう」とジェロントがスカパンに言ったとおりだ。[4]というわけで招き合うこともだんだん減ったし、以前の不満がまた頭をもたげてきた。そこへ家に居ても外に行っても隣り合わせになることからくる新たな不満が、さらに嫉妬が加わった。」

初版からの変更点は、誤植であったギユメの向きを直したこと、『スカパンの悪だくみ』からの引用をイタリック体にしたこと、段落末の puis「さらに」を sans compter に変えて同様の意味であるが格調高くしたことのほかは、動詞時制の過去時制への書き換えである。これによって、段落全体にまったく揺れない、回想される事象に対して一貫して同じ距離を保った語りが出現した。この変更によって叙述に全体として安定感が生まれるが、もとのテキストとはいくらかニュアンスが異なってくるのは確かである。この作品は語り手が自分（フルル）以外の人物の内面をも生き生きと描き出すことが特徴であるが、過去形に置いたためにフルルの父親と伯父の心理や状態は初版に比べると若干冷ややかに観察され、距離をおいて記述されている印象となる（[1]以下、とくに「二人は感じとった」「感じていた」）。さらに特徴的なのは、[3]以下で on dirait「みたいだ」が on aurait dit「みたいだった」と条件法過去形を用いた過去に関する推察となり、初版で表されていた語り手の主体的な表出や、それとともに読み手が語り手と一緒に物語場面をもとにして想像を働かせるような契機が失われた（ないしはかなり弱まった）ことである。そしてその後が続く、さきに引用（36）で一般的真理を表す類の現在形の例として紹介した

Mais ils ne le regrettent que dans la mesure où c'est justement irréparable. (「しかし後悔に酔うのは、まさに取り返しがつかないからにほかならない。」)は、過去形に置かれたために(「しかし後悔に酔ったのは、まさに取り返しがつかなくなったからにほかならなかった。」)、この事例から一般法則を導きだすのではなく、この事態に対して解説を加えるにとどまることになった。

なお、スイユ版が一貫した語り方を重視していることは、現在形に揃える方向の書き直しもおこなわれていることに、よく現れている。初版で現在形を用いた物語叙述が長く続けられている箇所で一時的に過去形が用いられている場合、スイユ版ではしばしばこうした対処がなされている。以下に一つだけ例を挙げておこう。小学校時代のフルルが、サイドともう一人の少年とともに三人で、父親たちの働いている工事現場を昼時に訪れ、ちゃっかり豪華な昼食にありついたというエピソードが現在形を用いた物語叙述で語られてきた部分に続いて現れる文章である。日本語訳の後にスイユ版の該当箇所を示す。なお、これまでと同様の強調のほか、登場人物フルルの内言を転写する自由直接話法のなかで用いられた単純未来形に太下線を付した。

- (51) [1]Nous nous quittons après avoir félicité Saïd de sa bonne idée. [2]A vrai dire, nos félicitations *manquaient* de chaleur et Saïd les *accepta* sans trop de conviction. [3]A part nos appareils digestifs tout le reste de nos personnes nous *reprochait* notre gourmandise. [4]Chacun de nous *voyait* se dresser devant ses yeux l'image sévère et quelque peu attristée de son père. [5]Que dira-t-il le soir ? (p.73-74)

「[1]うまいことを思いついてくれたとサイドを褒めて私たちは解散する。[2]本当のところはその褒め言葉には熱がこもっていなかったし、サイドの方もまともに受け取ってはいなかった。[3]消化器官だけを別にして、残りの身も心も私たちの全身が、餓鬼のごとき自分を非難していたのだ。[4]めいめいの頭には、ぬっと立って怖い顔をした、そしてどこか悲しげな父親の姿が浮かんでいた。[5]晩には何て言われるだろうか?」(85頁)

【スイユ版】

- [1]Nous nous quittons après avoir félicité Saïd de sa bonne idée. [2]A vrai dire, nos félicitations manquent de chaleur et Saïd les accepte sans

trop de conviction. [3]A part nos appareils digestifs tout le reste de nos personnes nous reprochait notre gourmandise. [4]Chacun des gourmands voit se dresser devant ses yeux l'image sévère et quelque peu attristée de son père. [5]Que dira-t-il le soir ? (Seuil, p.63)

「[1]うまいことを思いついてくれたとサイドを褒めて私たちは解散する。[2]本当のところはその褒め言葉には熱がこもっていないし、サイドの方もまともに受け取ってはいない。[4]食いしん坊たちめいめいの頭には、ぬっと立って怖い顔をした、そしてどこか悲しげな父親の姿が浮かんでいる。[5]晩には何て言われるだろうか？」

それまで現在形を用いて眼前描写的に出来事の進展を語ってきたテキストは、初版では [2] で、語り手からの解説をおこなうにあたって過去形を用いて距離感を示している。非常に分析的で省察的な語彙を駆使した [3] では、この事態を評する俯瞰的な対象化の姿勢が過去形の使用とマッチしている。続いて過去形で三人の少年の内心の状態を描写する [4] は取り返しのつかないことをしてしまった少年時代の自分たちを、取り返しのつかない過去の状況のなかに位置づけるという方法によって緊迫感を強めているように思われる。そして最後に [5] の自由直接話法で、この三人の少年の思いを総括するような疑問文が直接提示され、インパクトを与える。そこで段落が閉じられる。

一方スイユ版はこの段落の最後までを現在形で一貫させることを選択している。むろん [2] が語り手からの解説的な内容であることは初版と変わりがないが、ここで語りのスタンスが変わったという印象はなくそれまでの眼前描写的な語りの延長の印象を与える。おそらくそれゆえにあまりに思弁的な [3] は文がまるごと削除されることになったのであろう。語り手からのコメントの削除はスイユ版がこの作品に加えた変更の顕著な傾向であるが、(51)の部分では現在形の使用による眼前描写に徹して物語内容を伝える以外のことはおこなわないようにするために、[3] の文はなおさら削除の対象箇所とされたのだと推察される。そのあと [4] で少年たち（前の文の削除を補うべく nous が gourmands 「食いしん坊たち」に書き換えられている）の状態を目の前に見て証言するかのように現在形の叙述が続くことで、[5] の自由直接話法による彼らの内心の直接表現にスムーズにつながられる。

スイユ版がこのくだりを現在形に書き変えた理由の一つに、段落最後のこの自由直接話法の文 [5] への接続を違和感のないものにするという狙いがあっ

たものと推察できる。フランス語では、自由直接話法すなわち導入詞をおかず、登場人物の声を直接に（つまり人称や時制を地の文の語り的一致させずに）テキストが伝える語り方は、例外的とされ使用頻度が低い。スイユ版はその奇異な感じを薄めるために、文脈を現在形で維持して、自由直接話法の発話モードとのなだらかな連続を生み出した。一方フェラウンの初版は、この箇所では過去形叙述のすぐ次に自由直接話法を使っている。こうした自由話法は『貧者の息子』ではさきわめて多く用いられており、その詳細な分析は次稿においておこないたい。

以上、『貧者の息子』初版では、ひとつのくだりの内部においても物語叙述に用いる動詞時制を変化させることで、物語世界に密着したりさまざまな登場人物に接近したり語り手のコメントを物語内容に接続させたりする語り方と、物語内容に距離をとった語り方とが、随時交替するような叙述方式が好まれていることをみた。そしてスイユ版の方では、できるだけ大きなまとまりの単位ごとに過去形で（あるいは現在形で）叙述の時制を一貫させる、安定重視の語り方が採用されていることを確認した。

3) 現在形の物語叙述への移行

さて、現在形の物語叙述に話を戻し、それがどのような仕方で導入されるのかを検討したい。むろん、とくに説明がつかないようなおそらく感覚的なりズム上の理由（固定した語り方を好まない姿勢）によることも少なくないとは思われるが、『貧者の息子』において物語叙述の現在形が導入される箇所に読みとることのできる、過去形叙述からの移行の理由やそれをスムーズなものとして可能にする条件を、以下3項目に分けて検討してみたい。

a. 語り手の表出を契機として

まず観察されるのは現在形物語叙述への移行が語り手の主体的な表出や一般論の提示（Ⅲ. 1 およびⅢ. 2 で論じた、本稿の [A] と [B] の用法）としばしば連携していることである。多くの例があるが、(52) は、幼少期のフルと若い叔母たちとの交流を描いた章からの引用である。叔母のハルティとナナを紹介するこの第一部第6章ではとくに叙述時制の揺れが多く観察される。ハルティの性格を説明する過去形による物語叙述の段落のあと、ナナの台詞をはさんで語り手は以下のように述べる。語り手の主観の表出部分を太字で示す。他の強調はこれまでどおりである（現在形に置かれた動詞に下線を付し、単純

過去形と半過去形はイタリック体に、またスイユ版のテキストにおいては初版からの変更部分に影を付す。以下同様)。

- (52) Pour ça oui. Khalti regrette toujours sa précipitation. Alors elle se mortifie, elle pleure et essaie de réparer. (p.49)

「まったくそのとおり。ハルティはいつだって自分の短兵急をそのあとで後悔する。すると自分を責め苛み、涙を流して修復に努める。」(60頁)

【スイユ版】

Et c'était vrai. Khalti regrettait toujours sa précipitation. Alors elle se mortifiait, elle pleurait et essayait de réparer. (Seuil, p.44)

「たしかにそのとおりだった。ハルティはいつだって自分の短兵急をそのあとで後悔した。すると自分を責め苛み、涙を流して修復に努めるのだった。」

初版ではこのあと2頁にわたる長い段落がほぼ現在形で語られる。上の引用でわかるとおり、その導入部に現在形でなされる語り手の主体的な介入 (Pour ça oui. 「まったくそのとおり。」) があり、これが現在形を用いてハルティの人物像について説明していく叙述への橋渡しとなっていることがわかる。ちなみにスイユ版ではこのあたりの文章を過去形叙述に統一し、それとともに段落冒頭の Pour ça oui. もより記述的でまた過去形を用いて表現できる Et c'était vrai. 「たしかにそのとおりだった。」に書き変えているのがわかる。

語り手のコメントや介入が叙述態勢の転換を形作るケースはほかにも多くある。以下の引用 (53) では、[1] の文で語り手が語り手の現在を強調した導入をおこなう。そのあと [2] の文では基準となる時点が物語内容の時点に移り、この基準時点よりも前の事情が複合過去形で語られ、その後、現在形による物語叙述が続く ([4] 以降)。内容としては、フルルが幼い頃の母と母の妹たち (ハルティとナナ) の関係について記した部分である。これまでの強調に加え、複合過去形には二重下線を引く (以下同様)。

- (53) [1]Quand j'y réfléchis, à présent, je reconnais que ma mère et Khalti furent bien inspirées en se soumettant à Nana. [2]Ma mère que

les chagrins et les soucis n'ont point ménagée depuis la mort de ma grand'mère, puis de mon grand-père, est devenue une pauvre chose timorée, irrésolue, incapable de prendre parti; une fois qu'elle a émis timidement quelques objections [3]que lui suggère son bon sens ou son expérience de la vie, [4]elle s'incline et ne contrarie jamais ceux qu'elle aime. Quant à Khalti, elle ne pêche pas par excès de bons sens. (p.48)
「[1]今振り返って考えてみると、母とハルティがナナの言うなりに なったのは良いことだった。[2]私の祖母が亡くなり、次いで祖父が 逝ってから、たえず悲しみと心配に苛まれ続けた母は、何も決断す ることができなくなり、臆病で迷ってばかりのぐずな人間になってし まったからだ。[3]自分の良識や経験をもとにして、何か人への反論を 遠慮がちに述べることがあっても、[4]結局すぐに引っ込めてしまい、 いつも自分の愛する人たちの意見を通してしまうのだ。一方ハルティ は、良識がありすぎて困るといようなことは全然ない。」(59頁)

ちなみにスイユ版ではこの部分全体を過去形で統一し、現在形は半過去形に、 複合過去形は大過去形に書き直している。この(53)では、引用冒頭の語り 手の現在時にまつわる付加説明のほかに、[3]の補足説明的な関係節 (que lui suggère son bon sens ou son expérience de la vie 「自分の良識や経験をもとに して」)がおそらく非時間的観点からの(一般論的な)説明として現在形で記 されていることが、その後の、現在形による物語叙述への移行を促す役割を果 たしていると考えられる。このように二種類 ([1]の太字部分と[3]の関係節) の語り手のコメントによって語り手の現在と物語世界との距離が縮められるた め、物語内容の時点に寄り添った語り方に移行することはそれほど不自然に思 われないのではないだろうか。

以上にみてきたように、フェラウンは時制を揺動させた叙述法を好みながら、 それをおこなうにあたって、いわばちょうつがいとなる、現在形を使用す る語り手表出の言辞を周到に利用している。

b. 登場人物の主観性や知覚を契機として

ここで現在形を用いた物語叙述が、語りの「主観性」と大に関わるという 先行研究での指摘について確認しておきたい。田原⁷³も、また小熊も重視する のが、過去形から現在形への物語叙述の移行が、登場人物の主観や知覚に焦

点が当てられたときに起きやすいことである。小熊はヴォルテールの『カンディード』から次の例を引いている⁷⁴。以下には、本稿の形式に合わせ、過去形の物語叙述をおこなう単純過去形とそれに伴う半過去形をイタリック体にし、現在形に下線を付して提示する。

- (54) Au milieu de cette dispute on *entendit* un bruit de canon. Le bruit redouble de moment en moment. Chacun prend sa lunette. On aperçoit deux vaisseaux qui *combattaient* à la distance d'environ trois milles; le vent les *amena* l'un et l'autre si près du vaisseau français qu'on *eut* le plaisir de voir le combat tout à son aise.

(Voltaire, *Candide*)

「こんな議論の最中に一発の砲声が聞こえた。砲声はますます激しくなる。皆が望遠鏡を手に取る。約3マイルのところで二隻の船が闘っているのが目に入る。風によって二隻の船がフランス船のすぐ近くまで来たので闘いを心ゆくまで楽しんで見物できた。」

『カンディード』はいわゆる超越的な語り手による三人称記述の小説であるが、物語叙述に登場する人物、すなわちここではonで示されているフランス船の船上にいる人々が、海上の砲声を聞いたという記述の後で、彼らの知覚・主観に寄り添うように、現在形への移行が起きていることがわかる。小熊はこの例に先立ってこうした知覚や主観のクローズアップを、過去時制から現在形への「スイッチング」の理由として注目すべきだと述べている。

『貧者の息子』の例を見てみよう。第二部第4章では、過去形の物語叙述が章の冒頭から5ページ以上にわたって続く。フランスに出稼ぎに行っていた父ラムダンの帰郷を描くこのくだりに途中、以下の(55)の中にみられるように現在形におかれた部分がある。フルルを含め子供たちは、父の帰還を喜んで集まった来客たちが早く帰らないかと待っていた。

- (55) [1]L'individu qui *sortit* le dernier, à la grande satisfaction des enfants, *fut* l'oncle Lounis. [2]Fouroulou, il est vrai, *s'intéressa* à la conversation des deux frères puisqu'elle *se rapportait* à l'accident et aux souffrances endurées à l'hôpital. [3]Mais il sait qu'il a tout le temps devant lui pour se faire répéter le récit. [4]Pour l'instant, ce qui l'intéresse le plus

c'est la fouille des bagages. [5]Il était pressé aussi de parler de ses succès scolaires de vive voix, dans l'intimité. (p.132)

「[1]子供たちが大喜びで見守ったように、最後に引き上げて行ったのは伯父のルニスだった。[2]たしかに父たち兄弟の会話はフルルの興味を惹くものではあった、というのも事故のことや、病院で耐えた苦しみが話題にされていたからだ。[3]でもフルルには、これからいくらだってこの話を繰り返し聞かせてもらう時間があることがわかっている。[4]目下の最大の関心事であるのは荷解きだ。[5]学校で優秀な成績を修めたことも早く家族だけになって、じかに父に話したかった。」(151頁)

引用中の [3] と [4] が現在形の物語叙述になっているのは、[2] でフルルの心理に近づいて (Fouroulou (...) s'intéressa (...)) 「[……] フルルの興味を惹くものではあった [……]」準備をおこなった後で、登場人物フルルの主観をよりダイレクトに描く部分であるからだと説明できる。加えてこの [2] では、語り手の介入を示す現在形の動詞を用いた挿入句 (il est vrai 「たしかに」) があることも間接的に影響しているであろう。こうして読み手はフルルの内面に接近し、[3] 以降ではフルルの心情をつぶさにのぞき見するような印象をもつことと思われる。そしてこの段落は [5] に見るように、もう一度過去形による叙述でフルルを過去の物語のなかに定位して閉じ、この段落以降も過去形による叙述が続くことになる。なおスイユ版では、この (55) の部分全体が過去形に統一されている。

スイユ版との相違を検討することによって感じられるのは、初版にみられる物語叙述での現在形使用にはそれなりの理由があるのだが、(フランス語のオーソドックスな物語叙述法に属すとは言えないかもしれない) そうした理由とその効果をスイユ版の修正者は重視しなかったか、あるいはそれらに対する感覚を持っていなかったのではないかということである。たとえば (54) (55) で見たように、登場人物の主観や知覚を描く部分での現在形叙述は自然な感じをもたらしやすい。ところがスイユ版では、現在形の物語叙述が続いてきたくんだり (その部分はスイユ版でも現在形にしている) でも、次の段落に入ったときに、登場人物フルルの心理や主観が引き続き現在形を用いて描かれている箇所をわざわざ過去形に変更している例が観察できる⁷⁵。理由としては、その部分が段落の冒頭であり、段落後半では過去形が使われるのでそれに合わせてあ

らかじめ過去形に揃えたということが推察できる。スイユ版ではこのように、段落ごとにできるだけ統一を図るという方針が重視され、現在形の物語叙述が主観性の描写になじむというニュアンスは意識されていないようである。またさきにも触れたように、初版で一時的に過去形の叙述がおこなわれている部分については、スイユ版では周囲の現在形叙述の文脈に沿わせて動詞を現在形に改め一貫した語りの態勢を作りだすことが方針として採用されている。だが欧米言語も含め世界的にみて、物語叙述の節目と思われる箇所（とくに物語の冒頭や章・段落の始まり、および物語の終結点となる段落の終わりなどが典型的である）で過去形を用いて物語内容に対して距離をとったスタンスを明示し、物語叙述のまとまりを浮かび上がらせるという語り方は、一種の無意識のルールとしてかなり共有されているとすることができる⁷⁶。

以上、先行研究を参照し、説明可能な暗黙の一般ルールに従って『貧者の息子』でも、登場人物（たち）への主観的接近が、現在形による物語叙述への移行と関係していることが多いことを見ておいた。

c. 自由話法との接続

田原は先の論文で「語りの現在」の議論を、自由直接話法による（語り手にとって）他者の（すなわち登場人物の）声の転記の現象の考察へと展開している⁷⁷。本研究では、自由話法の諸例そのものについての検討は次稿に譲るが、現在形の物語叙述が自由話法との親和性が高いことについてはここで確認しておきたい。むしろこれは上にみた、語りにおけるさまざまな主観性の導入と現在形の物語叙述との関連の一環として議論しうるものである。

『貧者の息子』には、現在形による物語叙述が自由話法の文章への接続の機能を果たしているとみられる例が多く観察できる。あらかじめ想定されている自由話法での記述の下準備として、過去形での物語叙述をやめて現在形の物語叙述に移行し、しだいに語り手や登場人物の主観性を高めて印象的な自由話法に至る、という展開をとるケースがしばしば観察される。以下に二つだけ挙げておきたい。

一つ目は第一部の少年期のエピソードで、フルルの小さな怪我が原因で村中大騒動になった事件を語ったものである。このエピソード全体としては過去形叙述と現在形叙述の部分を織り交ぜて物語が語られており、そのなかでいろいろな立場の人物の考えや内言がテキストで紹介される点が特徴的である。そのうちの以下の(56)のくだりは現在形を用いた物語叙述によって、激しや

すいフルルの伯父について語っている。

- (56) [1]Ça suffit. [2]Mon oncle disparaît comme une trombe. [3]Instantanément, il imagine la scène: [4]ce Boussad d'un çof rival, armé d'un couteau, se jette sur son neveu sans défense. [5]Il veut tuer l'enfant, supprimer le dernier des Menrad... [6]Mon oncle court, vole à la djema armé d'un gourdin. [7]Une bouffée de haine lui monte du cœur à la tête. [8]Il va venger son honneur, il va imposer aux gens le respect de sa famille. (p.37)
- 「[1] それだけで十分である。 [2] 伯父は竜巻のような勢いで出て行く。 [3] 瞬時に伯父はこう思い浮かべる。 [4] ライバル一家のあのブサドがナイフを手にして、無防備な甥に飛びかかる。 [5] 奴はこの子を殺すつもりだ、メンラド家の最後の跡とりを抹殺しようと企んで……。 [6] 伯父は、太い棍棒をつかんで一目散に広場に向けて走り出し、飛んでいく。 [7] 憎しみがかつかと胸から頭へ燃え上がる。 [8] 俺が名誉を取り戻してくれる、わが家の尊厳を知らしめてやるのだ。」 (46-47 頁)

現在形で叙述されたこの部分は、もちろん生き生きとした生彩をもっている。登場人物である伯父の心理・主観に焦点を合わせていることも現在形の物語叙述の用い方として順当である。とりわけ「:」で導かれた伯父の内心の台詞 [4] とそれに続く自由直接話法の [5] の文がまさに生き生きと伯父の内心を伝える。 [6] の文は伯父の行動についての記述であるが、その前文までの伯父への密着の流れによって、この記述が現在形でおこなわれるのも自然であろう。 [7] の文は再び、より伯父の内面に切迫している。そのあとに置かれる [8] の文は、伯父について語り手が記述しているのではなく、日本語訳に示したように、伯父の内心の言葉を自由間接話法で語り手が引き写したものと考えるべきであろう。周囲の物語叙述が現在形でなされているので、動詞時制は現在形のままで人称だけを転換した自由間接話法である。時制の転換が起きないために語り手による物語叙述から自由間接話法への接続が非常になだらかである。このように自由話法を叙述内で活用するための素地として、現在形による物語叙述の態勢をとっておくことは効果的である。ちなみに上の引用部についてはスイユ版も動詞時制を変更することなく初版と同じままにしている。過去形叙述に変えてしまうと [5] や [8] の自由話法が唐突な印象を生じさせかねないことを理解していたからと推察できる。

もう一つ、最後に挙げておきたいのは、作品の後半部、青年になってからのフルを描くくだりである。すでに触れたように第二部以降は、語り手フルも語られる登場人物としてのフルも三人称で指示されるが、フルに内的焦点化が置かれ、フルを主人公として作品が語られることに変化はない。三人称が用いられているものの、自分を振り返るフルによって回顧がおこなわれていると考えてよい。さて、第二部第8章では結婚前の思春期のフルについてテキストでは以下のように回想記述が展開されている。これまで同様、単純過去形をイタリック体で、現在形と単純未来形に下線を引いて示す。

- (57) [1]La conception de l'amour dans les livres et peut-être dans une certaine réalité fut une révélation pour lui. [2]Il se doute bien pourtant que cette réalité n'est pas kabyle. [3]Il est sûr que sa femme n'aura rien de commun avec les héroïnes que chantent les poètes. [4]Il le regrette un peu mais il reconnaît que lui-même est tout aussi loin des héros. [5]Tant pis, il s'arrangera comme il pourra. [6]Il ne désespère pas d'être heureux. (p.165)

「[1]書物のなかで知り、そしてたぶんある程度は現実世界のなかでも知った愛の観念は、フルにとって新発見だった。[2]しかしながら、そうした現実は、カビリーの現実とは異なるのではないかと思っている。[3]自分が持つことになる妻は詩人たちが謳いあげるヒロインとは何の共通点ももっていないに違いないと確信している。[4]少しがっかりだけれど、自分もまた本の主人公とは似ても似つかないことはよくわかっている。[5]仕方ない、やれるようにやるだけさ。[6]幸せを諦めているわけではない。」(189頁)

文脈としては、おおむね過去形による物語叙述を通して、アルジェの師範学校時代にフルが男女交際の面ではほとんど冒険をしなかったことを語ってきたくだりである。[1]の文はその態勢を引き継いで単純過去形を用いて青年フルについて説明がされている。しかしフルの抱いている疑問や考え方が提示される[2]の文以降では現在形の叙述になる。これは上のb.で論じた、主観のクローズアップによる現在形物語叙述への移行として十分に納得がいく。そのあとはさらにフルの内心に接近し、とくに[3]と[4]の文の従属節のなかで示される内容とその表現は、フルの内言をそのまま写し取った

かのである。それに続く [5] の文は自由間接話法の文章であり、口語的な表現要素（とくに *Tant pis* 「仕方ない」という感嘆表現、また *il s'arrangera comme il pourra* 「やれるようにやるだけさ」というリズムカルな口語的表現）を駆使してフルルの心中の台詞をダイレクトに伝えている。この [5] の文は、(56) の [8] の文と同様に、人称だけを (je から il へ) 変化させ、時制の変化を伴わない、きわめて自由直接話法に近い自由間接話法である。それに引き続く [6] の文は、フルルについての語り手からの記述とも、青年フルルの内心の表明をテキストが汲み取ったものとも考えられるが、[5] からの流れからすると多分に後者のニュアンスが強そうである。このように現在形の使用を通じて [2] から [6] まだが、フランス語では違和感を生じやすい自由話法を多様に織り込みながら、なだらかな一続きの叙述を形成している。

以上に確認したように、現在形による物語叙述は、登場人物たちの知覚や内面への接近と類縁性があることに加えて、『貧者の息子』では自由話法をよりスムーズに導入するための手法として効果的に機能していることをみた。

ここまでⅢ. 3. 3) において、現在形の物語叙述に移行するにあたって、語り手の表出や、登場人物の知覚や主観への接近が「スイッチング」の手段としてしばしば用いられ、また現在形の物語叙述自体が、フランス語ではやや唐突な感じがあり頻繁には用いられない自由話法を抵抗なく導き入れるための素地を作っていることを確認した。

IV. おわりに

本稿では、『貧者の息子』の語りに関して、明らかな特徴である現在形の広範な使用について、そのタイプを分類して詳細に検討した。

本稿の中心的議論はⅢにおいておこなったわけだが、Ⅲ. 1 では、現在形が語り手の表出のために用いられているケース、Ⅲ. 2 では、それと関連するが、とくに一般的真理をテキストが提示するケース、Ⅲ. 3 ではストーリーを構成する物語内容の叙述に現在形が用いられるケースについて検討した。

Ⅲ. 1 ではこの作品がいかに語り手の存在と語り手が位置する世界の存在を強調し、さらにそれを物語内容の世界といかに連続的に位置づけているかを議論した。Ⅲ. 2 では、一般論の頻繁な提示によって、物語内容が普遍的な考察へと地続きになっていることをみた。また語りの問題として最も重要な物語叙述における現在形について検討したⅢ. 3 では、現在形の使用が通常言われる

「眼前描写」以上の機能をもつことを明らかにし、過去形叙述の部分と現在形叙述の部分とを交替させる語り方をこの作品が意識的に重んじていることを確認したうえで、現在形物語叙述の導入にあたって用いられている諸手段と、それをもつ効果（とりわけ自由話法への接続）を指摘した。

また、現在形を用いた語り手表出、一般論の展開、物語叙述のそれぞれが、この作品の文学的な意義と深く関わっていることについても触れた。すなわち、語り手の表出の現在形は、カピリー人がみずからカピリー世界を書くという営為そのものを作品内に込めた結果であると考えることができる。こうしてこの作品は物語内容を提示するだけでなく、それを物語る主体との相関関係を強調することで、虚構世界と読者の生きる現実世界とをつなぐ働きも有していることに注目した。また、この語り手によるコメントの延長上にある一般的真理をあらわす現在形もカピリー世界を普遍的な人類につなぎ合わせるものであり、私たちとフェラウンの生きる世界を、深い意味で出会わせる力をもっていると考えられる。またフェラウンに特徴的なこととして、普遍的な真理をめぐる議論が絶対的な唯一の真理の提示で終わることがなく、一度提起された一般的命題にほとんどかならず反問が投げかけられ、たえず新たな見方が創出されていくことを指摘した。フェラウン独特の相対主義的な思考が極められ、柔軟で貪欲な探究精神による人間の考究が展開されていると意義づけたい。最後に、『貧者の息子』の（とりわけ初版の）大きな特徴である現在形による物語叙述について詳細に検討し、この叙述法がけっして無作為に理由なく採択されたものではなく、一定の傾向と条件のもとに現れ、それなくしては生まれない文学的な効果を発揮していることを見た。すなわち、過去形の物語叙述の態勢のなかで現在形の物語叙述に移行することは単にリズムカルにまた生き生きと場面を描くだけでなく、語り手の主体的な表出と物語叙述の橋渡しをおこない、ストーリーを伝えることと語り手自身の存在を強調することの両面を高めるような語りを生み出していた。また自由話法への接続を含め、さまざまな登場人物の主観性をよりダイレクトに作品に盛り込むことにつながっていた。

この主観性の強調と語りの技法との関連の問題は、次稿においてこの作品における自由話法の使用について検討する際により綿密に議論する。合わせて、『貧者の息子』における物語行為の時間（発話時点）のきわめて特徴的な設定に着目して、この作品が「物語る」という体験そのものを主題化した小説であることを今後明らかにしていきたい。

- * 本論文は、文部科学省科学研究費基盤研究 (C) 平成 26-30 年度「21 世紀的視座から見る北アフリカ (チュニジア・アルジェリア) の現代文学状況」(研究代表者・青柳悦子)、同 (A) 平成 24-29 年度「アラビアンナイトの形成過程とオリエンタリズムの文学空間創出メカニズムの解明」(研究代表者・西尾哲夫)、同 (B) 平成 26-29 年度「アラブ=ベルベル文学の比較地域文化的研究体制の構築」(研究代表者・鶴戸聡) の補助を受けた研究成果の一部である。

注

- 1 Mouloud Feraoun, *Le Fils du pauvre, Menrad, instituteur kabyle*, Le Puy: Les Cahiers du nouvel humanisme, 1950 (ムルド・フェラウン『貧者の息子——カピリーの教師メンラド』青柳悦子訳, 水声社, 2016 年); rééd. *Le Fils du pauvre*, Paris: Seuil, 1954.
- 2 仏語と英語を対照した最もまとまった研究として以下の著作が知られる。Hoger Chuquet, *Le Présent de la narration en français et en anglais*, Paris: Ophrys, 1994.
- 3 稿者がこの語り方の誕生の歴史的背景と経緯および特質を研究した論文として以下がある。青柳悦子「日・英・仏語における物語言語ルールの比較」、『比較文学研究』(筑波大学第二学群比較文化学類) 第 2 号, 2006 年; 同「日本近代小説の成立と語りの遠近術——「地の文」における「タ型」と「ル型」の交替システム」、『文藝言語研究 文藝編』(筑波大学大学院人文社会科学研究所科芸・言語専攻) 第 55 号, 2009 年; Etusko Aoyagi, “An Analysis of the temporal system in Japanese narrative text: On the Taxis Mode Narration and its Functions”, in Sung-Won Cho ed., *Expanding the Frontiers of Comparative Literature: A Return to the Transnational Tradition* (Proceedings of 2010 ICLA [International Comparative Literature Association] Seoul Congress), Vol. I, Seoul: Chung-Ang University Press, 2013. また橋本陽介『物語における時間と語法の比較詩学——日本語と中国語からのナラトロジー』(水声社, 2014 年) は, 中国語と対照しつつ幅広く日本語物語叙述における動詞時制の交替現象について考究している。
- 4 これについては, 青柳「日・英・仏語における物語言語ルールの比較」で触れたことがある。またここで紹介した日本語作品の英・仏語への翻訳の事例からも, フランス語の方が英語よりは過去形と現在形を混在させた物語叙述に対する許容度が高いことが観察できる。
- 5 探偵小説の形式を借りたニューヨーク三部作のなかでもとくに『幽霊たち』(Paul Auster, *Ghosts*, 1986) が, 現在形の多用で有名である。
- 6 Jhumpa Lahiri, *The Namesake*, 2003.
- 7 たとえば最近の『吾輩は猫である』、『三四郎』の英訳 (Natsume Soseki, *I am a cat*, translated by Aiko Ito, Tokyo: Tuttle Publishing, 2001; *Sanshiro*, translated by Jay Rubin, Cambridge: Penguin Classics, 2010) ではこれまでの訳と比べると, 時制の使用法や視点の転換などの叙述上の細かなニュアンスについて, 原文の表現を尊重する姿勢が顕著である。
- 8 Roman Jakobson, “Shifters, verbal categories, and the Russian verb” [初出 1957 年] (in R. Jakobson, *Selected Writings*, Vol.2: *Word and Language*), The Hague/Paris: Mouton, 1971, pp.130-147 (ロマン・ヤーコブソン「転換子と動

詞範疇とロシア語動詞』、『一般言語学』川本茂雄監修、田村サ子・村崎恭子・長嶋善郎・中野直子共訳、所収、みすず書房、1973)。ここでヤコブソンは、発話の時点を基準点とする「絶対時制」Absolute tenseに対して、すでに述べたことを基準点として同時性や先行性などに応じて次に述べる事柄を位置づける「相対時制」Relative tenseに着目し、これを（「ダイクシス」Deixisと対照させて）「タクシス」Taxisと命名した。

- 9 アラビア語は多くのセム語（アジア・アフロ語系諸言語）の言語と同様に、「完了」と「未完了」の二大アスペクトの区分によって動詞体系が構築されている言語である。なおアラビア語の現代小説では、完了形（過去形）の物語叙述のなかで、未完了形（現在形）を用いた物語叙述（物語内容・ストーリーの叙述）が展開される事例を容易に見出すことができる。以下はたまたま稿者が目にした事例である。ザカリーヤ・ターミル「ガゼルを食べる人々」（Zakariyya Tamir, “aklu l-gazlani”, in Z. Tamir, *Al-Qunfudh*, Beirut: Riyad al-Rayyi, 2005 [Arabic]) は4頁の短編作品であるが、そのアラビア語テキストを見ると、ある段落の途中から20行ほど未完了形（現在形）の物語叙述が展開している。この作家については別の短編集『酸っぱいブドウ』の第15編「噂の男」、第35編「助けを求めていた男」、第56編「追いうち」などで、この現象を日本語訳を通じて確認することもできる（柳谷あゆみ『現代シリアの短編小説 ザカリーヤ・ターミル著「酸っぱいブドウ」(ヒスリム)』、『Occasional papers』第19号、上智大学アジア文化研究所、2016年)。またパレスチナの小説家ガッサーン・カナファーニーの「ハイファに戻って」は一人称の回想形式をとった短編小説であるが、物語叙述の時制が頻繁に変わることを特徴とする作品である（Ghassan Kanafani, “A'id ila Hayfa”, 1970 [Arabic]; ガッサーン・カナファーニー「ハイファにもどって」奴田原陸明訳、『太陽の男たち／ハイファに戻って』、河出書房新社、2009年；「ハイファに戻って」岡真理訳、『季刊『前夜』第9～12号、2006年秋～2007年夏)。
- 10 カザフスタンの大学研究者である Yeveyev はドイツ語とロシア語のタクシス性について研究書を著わしている (Vyacheslav Yevseyev, *Ikonizität und Taxis: Ein Beitrag zur Natürlichkeitstheorie am Beispiel des Deutschen und Russischen*, Frankfurt: Peter Lang, 2002)。ドイツ語著作なので稿者は残念ながら読むことができないが参考までに挙げておく。なお Yeveyev は「タクシス」的なつながりが文章の中で文のまとまりを作ることに着目し、このまとまりを「タクシス・ユニット」と名付けた。そして論文 “Measuring Narrativity in Literary Texts” (in Jan Christoph Meister ed., *Narratology beyond Literary Criticism: Mediality, Disciplinarity*, Berlin/New York: Walter de Gruyter, pp.109-124) において文学テキストの長さに対してどれだけの数のタクシス・ユニットが存在するかによって「物語性」の度合いを数値的に測ることを試みた。この研究の示唆的な点は、いわゆる過去形と現在形の文を組み合わせることによって物語テキストの単位が形成されるという考え、そしてそのまとまりが物語の文学性となんらかの点で関わっているという立場が示されていることである。
- 11 チベット（諸）語の相対時制については、以下の浩瀚な研究がある。Bettina Zeisler, *Relative Tense and Aspectual Values in Tibetan Languages, A Comparative Study*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 2004。

- 12 たとえば、英語の文章 “He said to me that he was hurry.” では、過去形の導入詞に導かれた間接話法の台詞部分の動詞時制を導入詞に合わせて一致させなくてはならない (he was). これに対し、時制の一致をおこなわない日本語ではこの文の訳は「彼は急いでいると言った」と、主動詞に対する同時性を示す「現在形」(相対時制としての)⁷⁾が用いられる
- 13 橋本は、日本語物語叙述における文末の「タ型」と「ル型」の交替現象は必ずしも「相対時制」の原理に拠っていないことを強く主張している. すなわち「タ型」が過去と想定される時点で物語内の出来事を定位し、それとの同時性という観点で「ル型」が用いられるのではないという基本認識に立って、具体的に事例を分析している. 橋本, 前掲書, pp.148-195 など.
- 14 稿者の論文, Etsuko Aoyagi, « La narration instable et une vision « trans-subjective » dans *L'Étage invisible* d'Emna Belhaj Yahia; un roman tunisien vu selon l'optique japonaise » (『外国語教育論集』第 37 号, 筑波大学外国語センター, pp.63-73) では、この観点からチュニジアの現代作家エムナ・ベルハージ・ヤヒヤの小説『見えない流れ』(Emna Belhaj Yahia, *L'Étage invisible*, Tunis: Cérés, 1996; 邦訳, エムナ・ベルハージ・ヤヒヤ『見えない流れ』青柳悦子訳, 彩流社, 2011 年) について論じた.
- 15 Martine Mathieu-Job, *Le Fils du pauvre de Mouloud Feraoun, ou la fabrique d'un classique*, Paris: L'Harmattan, 2007. タイトルを日本語でも示しておこう——『ムルド・フェラウンの『貧者の息子』, あるいはある古典の誕生』. この見方は共著作である前著の副題「ある文学の創出」でも示されていた (Robert Elbaz & Martine Mathieu-Job, *Mouloud Feraoun, ou l'émergence d'une littérature*, Paris: Karthala, 2001).
- 16 フェラウンは友人であるフランス人作家エマニュエル・ロブレス (注 17 参照) に宛てた書簡のなかで、カピリー人のふつうの人間 (un bon homme) を、ないしはカピリー人をふつうの人間として、描くことが作家活動を開始した動機であったことを述懐している. そして、その際、この試みを、ロブレスを含めほかのフランス語作家たちには成しえないことだとし、自分 (たち) の文学をヨーロッパ系入植者 (コロン) の作家たちの文学と明確に対抗するものとして位置づけていることに注意したい (1959 年 4 月 6 日付書簡, cf. Mouloud Feraoun, *Lettres à ses amis*, Paris: Seuil, 1969, pp.153-154). この点については以下の拙稿でも議論した. 青柳悦子「ムルド・フェラウン、歪められた作家像の再検討のために——E・ロブレスとの関係を中心に」、松田幸子ほか編『異文化理解とパフォーマンス』春風社, 2016 年, とくに pp.337-338; 同「1938-1939 年のカピリー報道——カピリー人作家フェラウンの出発点として」『文学研究論集』(筑波大学比較・理論文学会), 第 35 号, 2017 年 3 月刊行予定.
- 17 Emmanuel Roblès (1914-1995). アルジェリアのオラン出身. スイユ社に「地中海叢書」を創設し監修した. ロブレスとフェラウンの関係については青柳「ムルド・フェラウン、歪められた作家像の再検討のために」で検討をおこなった.
- 18 このスイユ版は、初版テキストの三分の一に当たる最後の 50 頁を削除するかたちで刊行された. したがってスイユ版との対照が可能なのは、初版テキストのうち前半三分の二の部分である. なお削除の対象となった部分は、ロブレスがフェラウンの死後に編纂した撰文集『記念日』(Mouloud Feraoun, *L'Anniversaire*,

- Paris: Seuil, 1972) に、初版にほぼ忠実なかたちで再録された。ただし新たな章題が付けられるといった編集上の手直しや、若干の削除が存在する。『貧者の息子』邦訳書の巻末資料および訳者あとがきも参照されたい。
- 19 ただし、ある意味で「ネイティブチェック」を経た原稿であると言える。フェラウンは執筆に5年をかけたほか、1944年10月に本文を一旦書きあげたのち刊行まで6年を要し、その間に何度も原稿を推敲し、また加筆をおこなったようである。最初に出版を勧めてくれたフランス人の大生物学者エドモン・セルジャンら友人・知人・恩師らにも目を通してもらっている。出版社探しの過程で1948年春にはタイプ原稿を作ったが、もとの手書きの原稿は削除線や書き直して非常に読みにくい状態にまでなっていることをフェラウンは友人の一人に手紙で伝えている。1949年12月20日付のヌエル夫妻（パリ郊外で教員をしているフランス人の夫婦）宛ての手紙（Feraoun, *Lettres à ses amis*, p.24）参照。なお、出版までの経緯は、以下の論文とジャーナリスト、レンズィニによるフェラウンについての詳細な伝記にもまとめられている。Jeanne Adam, « Les débuts littéraire de Mouloud Feraoun: de « Menrad Fouroulou » au « Fils du pauvre » », *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, vol.81, n° 6, nov.-déc.1981; José Lenzini, *Mouloud Feraoun, un écrivain engagé*, Arles/Paris: Actes Sud, 2013, esp. pp.133-157.
- 20 現在、アルジェリアでもフランスでも直接参照することがきわめて困難な『貧者の息子』の初版を、稿者が直接手に取れるように尽力してくださった筑波大学中央図書館レファレンス担当の職員の方々には、記して感謝したい。所蔵を謳っている世界の図書館300ほどの施設に、実際にそれが初版であるのかを1件ずつ確かめてようやく実物を所有する図書館をみつけ、相互貸借の手続きをとっていただいた。
- 21 その歴史的総括として以下が参考になる。Pierre Le Goffic, « Présentation », in Le Goffic éd., *Le Présent en français*, Cahiers Chronos 7, Amsterdam-New York: Rodopi, 2001, pp.i-vi
- 22 小熊和郎「フランス語現在形と不定性」、春木仁孝・東郷雄二編『フランス語学の最前線2 特集：時制』ひつじ書房、2014年、pp.249-294.
- 23 デンマークのフランス語学者H.Stenの表現（cf. Hoger Sten, *Les Temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Copenhagen: E. Munksgaard, 1952）.
- 24 現在形のもつ近接過去の用法については「不完全な実現」と小熊は補足説明している。小熊、前掲論文、p.255.
- 25 小熊は実況中継に代表される用法を、表現される事行（行為や出来事）が発話と同時の瞬間に集約されることを特徴とするとして「事行とのシンクロニー」という項目を立て、ここに「実況中継」、「遂行発話」（開会や閉会の宣言、約束など）や「気づき」の表現を含めている（小熊、前掲論文、pp.257-258）。その上で、このタイプの言表について論文随所で注意深い考察をおこなっている。
- 26 こうした格言や真理の現在形を用いた言表において、発話の時点や発話の場がまったく消去されてしまうのではないことを小熊は主張している。小熊、前掲論文、p.257。この問題については本稿Ⅲ. 2. 3) で論じる。
- 27 小熊はト書きやジョークが用いる現在形もここに関連させて位置づけている（小熊、前掲書、とくにpp.258-260）。

- 28 新聞記事の例 (*Le Nouvel Observateur*, 1989年11月9-15日号から, Chuquetの前掲書, pp.70-71を典拠とする)。この例のように, 明確な過去の時点の表現と現在形を共起させるのは, 英語では許容困難とされる。小熊, 前掲論文, p.283参照。
- 29 補足説明を省略して引用した。
- 30 物語叙述のなかで, 導入の表現 (Il a dit 「彼は言った」など) や引用のカッコ類を用いることなく, 地の文に融合させたかたちで, 登場人物の内言や思考あるいは知覚内容などを表現する文体。自由間接語法と自由直接語法がよく知られ, 多数の研究の蓄積がある。現在形による物語叙述を多く扱う本稿では両者の区別がつかない事例も多く, 以下の研究に倣ってこの二つを「自由語法」と括ることがとくに有効となる。阿部宏「疑似主体に基づく主観性について——自由語法の仏日対照を中心に」, 川口順二編『フランス語学の最前線3 特集: モダリティ』, ひつじ書房, 2015年所収。
- 31 以下本稿において, 原作からの引用は引用符をつけずにおこない, 初版での出典ページを記す。それに添えて日本語訳と邦訳書の該当ページを記す。ただし分析上の理由から本稿での日本語訳は, 読みやすさを重んじた面もある邦訳書での訳し方とは異なることがあることをお断りしておく。
- 32 それぞれLa Famille 「家族」, Le Fils aîné 「長男」, La Guerre 「戦争」と題されている。原書では番号は付されていないが, 本稿では邦訳書にならって, 便宜上各々を第一部, 第二部, 第三部と呼ぶことにする。
- 33 Gérard Genette, « Discours du récit », in G. Genette, *Figures III*, Paris: Seuil, pp.252-253 (ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール——方法論の試み』花輪光・和泉涼一訳, 書肆風の薔薇 [水声社], 1985年, pp.288-289)。
- 34 マチュー=ジョブは『貧者の息子』における語り手の介入が, なにか一つのドグマに拘泥するものではなく, むしろあらゆる種類の考え方を尊重する方向にあることを指摘している。Mathieu-Job, *op.cit.*, p.40。
- 35 ヴォルフガング・イーザー『行為としての読書——美的作用の理論』饒田収訳, 岩波書店, 1982年, p.58参照。
- 36 Mathieu-Job, *op.cit.*, pp.45-46。
- 37 この問題については, 青柳の論文「1938-1939年のカピリー報道」で論じた。
- 38 たとえばスタンダールの『赤と黒』でも, 単純過去形 (イタリック体で示す) と語り手の主観的モードをあらわす表現 (下線で示す) は共存している。阿部, 前掲論文, p.340に挙げられている例。

Ce jeune prêtre fut effrayé sans doute des yeux tendres que fixait sur lui la timidité de Julien, et ne se soucia point de reconnaître ce provincial.

「この若い僧侶は, ジュリアンがおずおずと自分の方を優しい眼つきで見ているのに気が付いて, きつと不気味に感じたろう。しかし彼はこの田舎者が誰であるか, 思い出そうとさえしなかった。」

(出典: Stendhal, *Le Rouge et le noir*, Paris: Garnier Classiques, p.244, スタンダール『赤と黒』桑原武夫・生島遼一訳, 岩波書店, 全2巻, 下377頁)

- 39 Émile Benveniste, *Problèmes de linguistique générale*, Paris: Gallimard, 1966 (エミール・バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』岸本通夫監訳, みすず書房, 1983年), 第17章「ことばにおける主体性について」。

- 40 「説明時制」(現在形など)と「語り時制」(単純過去およびそれに伴う半過去形など)を区別した上で、その共存例を分析する西村淳子は、ミッシェル・トゥルニエの回想録(*Le Médiannoche amoureux*)からの例を引いている。西村淳子『フランス語時制論——発話行為のテキスト言語学』春風社、2015年、p.70。
- 41 石浜裕子は『貧者の息子』を論じた博士論文のなかで、ミシュレからのエピソードの出典が『私の青年時代』であることを突き止めた。さらに、遺稿として残された日記や回想記の断片をもとにミシュレ夫人によって構成されたというこのテキストの特殊性を解説したうえで、この回想録と『貧者の息子』との関係について考察している(石浜裕子「獲得した言語で書くこと——ムールード・フェラウン『貧者の息子』の一読解」(一橋大学大学院言語社会研究科提出博士論文)、2015年、pp.145-153)。
- 42 Je l'appelais Titi — Le nom lui est resté —. (p.29)「私はこの姉のことをティティと呼んでいた——今でもそうである——。」(35頁)。Mon camarade Akli se rappelle encore à présent (...) (p.30)「友達のアクリは、(……)を今でも覚えていてという。」(37頁)。また本稿の引用(47)中のIls se les rappelleront toujours. (p.149)「二人〔＝フルルと学友のアジル〕はこれからも一生忘れることがあるまい。」(169頁)など。
- 43 その代表として、マグレブ文学研究では大変な影響力をもつアブデルケビル・ハティビの見解は見過ごせない。ハティビは北アフリカの小説を総論した比較的早い著作で、フェラウンを欧化された、人柄の温厚な(だけの)作家と位置づける。また、『貧者の息子』については作者の少年時代を語った純粋な自伝と規定した上できわめて厳しい評価を下し、その文学的価値をほぼ全面的に否定している(Abdelkebir Khatibi, *Le Roman maghrébin*, Rabat: Société marocaine des éditeurs réunis, 1979, pp.49-52)。むろんスイユ版をもとにした判断であるが、ハティビのみならず一般に共有されていたフェラウン理解ならびに『貧者の息子』への評価の典型をここに見ることができる。また、作者フェラウンの実人生を説明する際に、作品の内容を直接的に作者に当てはめて誤った理解を流布してしまう例もこれまでしばしば見られた。とくにグレーズによる伝記(Jack Gleize, *Mouloud Feraoun*, Paris: L'Harmattan, 1990)はその傾向が甚だしい。
- 44 スイユ版がこの「逆言法」的な語りや、語らない事柄に語り手が向ける注意を、いたずらに煩雑な表現法と捉えていたふしも感じられる。たとえば妹ザズのごとはこれまで語ってこなかったしここでも語らない、と語り手が述べているくだり(第一部第10章、p.93、邦訳107頁)はスイユ版では削除されている(Seuil, p.79)。
- 45 たとえばフルルは自分の述べたことを次のように否定しながら回想と反芻を続ける。Pourtant, s'il y songe bien, cette société de normaliens ne fut pas aussi idéale qu'il s'entête à le dire. p.163「しかしよく考えてみれば、師範学校生たちの作るこの世界は、フルルが懸命に言い立てるほど理想的なものではなかった。」(187頁)。自分がすでに語った事に対して否定を加えるこうした自己否定的な語り方については、本稿Ⅲ. 2. 4)でも触れる。
- 46 Mathieu-Job, *op.cit.*, p.36, pp.143-151.
- 47 Mouloud Feraoun, *Le Fils du pauvre*, Menrad, instituteur kabyle, Alger: ENAG, 2002.

- 48 Mathieu-Job, *op.cit.*, p.147 *et sqq.*
- 49 茨木博史は「フルール・メンラドの彷徨——ムールード・フェラウン『貧者の息子』の語りが孕む問題」(『Résonances』第3号, 東京大学教養学部フランス語部会, 2005年)において, カビリー人をまったく特殊なものとみなす“カビリー神話”への抵抗として, 「カビリア人の特異性を否定し, かつその固性[ママ]を主張するという, 作品を貫く二方向の運動」を読み取っている. こうした「脱神話化」については以下も参照のこと. Elbaz & Mathieu-Job, *op.cit.*, p.27 *et sqq.*
- 50 原文 Ils ressemblent à tout le reste des humains. (p.193) 邦訳では「人とはそういうものだ」とした (221頁).
- 51 Cf. 藤川隆男 (編) 『白人とは何か? ——ホワイトネス・スタディーズ入門』, 刀水書房, 2005年, pp.30-31.
- 52 カビリー地方をめぐる以下の三つの新聞連載記事による: René Janon, « Fragments pour un diorama de la haute Kabylie », *L'Écho d'Alger*, du 12 au 25 décembre 1938 (計10回); Albert Camus, « Misère de la Kabylie », *Alger-Républicain*, du 5 au 15 juin 1939 (計11回); Roger Frison-Roche, « Kabylie 39 », *La Dépêche algérienne*, du 8 au 17 juin 1939 (計10回). なお, この3つの新聞記事の詳細とフェラウンとの関係については, 青柳の論文「1938-1939年のカビリー報道」で論じた.
- 53 Mathieu-Job, *op.cit.*, pp.145-146.
- 54 *Ibid.*, pp.112-115. また茨木博史も, 「人々 on」という「中性の主語」を立てた現在形による語りについて触れている (茨木, 前掲論文, p.35).
- 55 小田淳「不定代名詞 on による行為主体の希薄化について」, 東郷雄二・春木仁孝編『フランス語学の最前線4 特集: 談話, テクスト, 会話』ひつじ書房, 2016年, p.20 ほか.
- 56 田口紀子「フランス語人称代名詞の転用」『仏文研究』第21号, 京都大学フランス語学フランス文学研究会, 1992年.
- 57 ここでは, 自らを治療する者の意.
- 58 Elbaz & Mathieu-Job, *op.cit.*, p.33.
- 59 小田が挙げているのは以下の例である (小田, 前掲論文, p.6).
- La preuve que le petit prince a existé c'est qu'il était ravissant, qu'il riait, et qu'il voulait un mouton. Quand on veut un mouton, c'est la preuve qu'on existe. 「王子さまが存在したという証拠は, 彼がチャミングで, にこやかで, 羊を欲しがっていたことだ. 羊を欲しがるといのは, その人が存在した証拠だろ」(Saint-Exupéry, *Le Petit Prince* より).
- 60 小熊, 前掲論文, p.257.
- 61 フェラウンが入学した1932-33年度は, 〈ヨーロッパ人部門〉は入学者54名に対し受験者は64名, 〈原住民部門〉は入学者20名に対して受験者は318名であったという. 『貧者の息子』の記述でも, フルルがわずか「二十名」の(「原住民」)合格者の一人であったこと, そして落胆した大勢の不合格者たちがそのまわりにいたことが語られている.
- 62 Le pauvre Menrad est incapable de philosopher. Elle [= cette attitude] résulte du sentiment très net qu'il a de sa faiblesse. (p.8) 「小難しい思弁を弄すること

は哀れなメンラドにはできない。ただ、自分は大了たことのない人間だという動かしがたい思いがそうさせるのだ。」(12頁)。より直訳的に訳せば、「哀れなメンラドには哲学することはできない。それ〔前段落で述べた謙虚な態度〕は、自分の弱さにたいするきわめて明確な自覚に由来するのだ」となる。

- 63 Maurice Grevisse, *Le Bon usage*, 3^e édition, Paris: Duculot, 1994, p.124.
- 64 Genette, *op.cit.*, p.152 et sqq. (邦訳 138 頁以下).
- 65 田原いずみが語りの体制の変化を論じる際に用いる表現。田原いずみ「語りの現在形についての考察」、『明學佛文論叢』第 45 号, 明治学院大学文学会, 2012 年など。
- 66 岸彩子「情報の部分性と全体性——実況中継に用いられる現在形を巡って」, 春木仁孝・東郷雄二編『フランス語学の最前線 2 特集: 時制』ひつじ書房, 2014 年, とりわけ第 4 節, p.235 以下。
- 67 橋本, 前掲書, pp.110-127, 129 およびこの著作の随所。
- 68 同書, p.117.
- 69 田原, 前掲論文, p.68.
- 70 原書では閉じのギュメが逆向きになっていたが, 機会的なミスとして訂正した。
- 71 現在形と単純過去形が同形であるが, ここではそれまでの現在形の文脈から, 非時間的な用法としての現在形を使用した引用句説明であると考えた。
- 72 スイユ版ではこの一節は過去形の使用で統一されているので, 単純過去形と判断した。
- 73 田原, 前掲論文, p.72 以下。
- 74 小熊, 前掲論文, p.284. この例文は Chuquet の前掲論文 p.223 からの引用。
- 75 p.121-122 (Seuil, p.103). パリの父から手紙が届いたシーン。日本語訳のみ示しておく。「初めての手紙を書く勇気がフルルにはないのだ。手紙にはいろいろな決まり文句があるのは知っているが, その文句を知らないからだ。これからは他人に頼らず手紙が書けるように, そういう慣用句を身につけると密かに誓う。「ご健勝をお祈りしつつ」, 「あなたの忠実な息子より」, それから「至急お返事を賜りたく」などといった結びも覚える」(140 頁)。以上のとおり初版では動詞はすべて現在形, スイユ版ではそれが過去形に変更されている。
- 76 橋本, 前掲書, pp.198-199; Yevseyev, “Measuring Narrativity in Literary Texts” (本稿, 注 10 を参照のこと)。以下の研究も物語叙述の括りを考えるのに重要である。Paul Hopper, “Aspect and Foregrounding in Discourse”, in Talmy Givon ed., *Discourse and Syntax (Syntax and Semantics, Vol.12)*, New York: Academic Press, 1979.
- 77 田原, 前掲論文, p.72 以下。

参考文献

[一次文献]

Feraoun, Mouloud, *Le Fils du pauvre, Menrad, instituteur kabyle*, Le Puy: Les Cahiers du nouvel humanisme, 1950 (ムルド・フェラウン『貧者の息子——カビリーの教師メンラド』青柳悦子訳, 水声社, 2016 年)

—, *Le Fils du pauvre*, Paris: Seuil, 1954

—, *Le Fils du pauvre, Menrad, instituteur kabyle*, Alger: ENAG, 2002

[二次文献]

- Adam Jeanne, « Les débuts littéraire de Mouloud Feraoun: de « Menrad Fouroulou » au « Fils du pauvre » », *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, vol.81, n°6, nov.-déc.1981, pp.944-952
- Aoyagi, Etusko, “An Analysis of the temporal system in Japanese narrative text: On the Taxis Mode Narration and its Functions”, in Sung-Won Cho ed., *Expanding the Frontiers of Comparative Literature: A Return to the Transnational Tradition* (Proceedings of 2010 ICLA [International Comparative Literature Association] Seoul Congress), Vol.I, Seoul: Chung-Ang University Press, 2013, pp.287-294
- , « La narration instable et une vision « trans-subjective » dans *L'Étage invisible* d'Emna Belhaj Yahia; un roman tunisien vu selon l'optique japonaise », 『外国語教育論集』(筑波大学外国語センター) 第37号, 2015, pp.63-73
- Auster, Paul, *Ghosts*, Los Angeles: Sun & Moon Press, 1986 (ポール・オースター『幽霊たち』柴田元幸訳, 新潮文庫, 新潮社, 1995年)
- Belhaj Yahia, Emna, *L'Étage invisible*, Tunis: Cérès, 1996 (エムナ・ベルハージ・ヤヒヤ『見えない流れ』青柳悦子訳, 彩流社, 2011年)
- Benveniste, Émile, *Problèmes de linguistique générale*, Paris: Gallimard, 1966 (エミール・バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』岸本通夫監訳, みすず書房, 1983年)
- Camus, Albert, « Misère de la Kabylie », *Alger-Républicain*, du 5 au 15 juin 1939
- Chuquet, Hoger, *Le Présent de la narration en français et en anglais*, Paris: Ophrys, 1994
- Elbaz, Robert & Mathieu-Job, Martine, *Mouloud Feraoun, ou l'émergence d'une littérature*, Paris: Karthala, 2001
- Feraoun, Mouloud, *Lettres à ses amis*, Paris: Seuil, 1969
- , *L'Anniversaire*, Paris: Seuil, 1972
- Frison-Roche, Roger, « Kabylie 39 », *La Dépêche algérienne*, du 8 au 17 juin 1939
- Genette, Gérard, « Discours du récit », in G. Genette, *Figures III*, Paris: Seuil, 1972 (ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール——方法論の試み』花輪光・和泉涼一訳, 書肆風の薔薇 [水声社], 1985年)
- Gleize, Jack, *Mouloud Feraoun*, Paris: L'Harmattan, 1990
- Grevisse, Maurice, *Le Bon usage*, 3^e édition, Paris: Duculot, 1994
- Hopper, Paul, “Aspect and Foregrounding in Discourse”, in Talmy Givon ed., *Discourse and Syntax (Syntax and Semantics, Vol.12)*, New York: Academic Press, 1979, pp.213-241
- Jakobson, Roman, “Shifters, verbal categories, and the Russian verb” in R. Jakobson, *Selected Writings, Vol.2: Word and Language*, The Hague/Paris: Mouton, 1971 [初出1957年], pp.130-147 (ロマン・ヤーコブソン「転換子と動詞範疇とロシア語動詞」, ヤーコブソン『一般言語学』川本茂雄監修, 田村すゝ子・村崎恭子・長嶋善郎・中野直子共訳, みすず書房, 1973年所収)
- Janon, René, « Fragments pour un diorama de la haute Kabylie », *L'Écho d'Alger*, du

12 au 25 décembre 1938

- Kanafani, Ghassan, "A'id ila Hayfa", 1970 (arabic) (ガッサーン・カナファーニー「ハイファにもどって」 奴田原睦明訳, 『太陽の男たち／ハイファに戻って』, 河出書房新社, 2009年所収; 「ハイファーに戻って」 岡真理訳, 季刊『前夜』第9～12号, 2006年秋～2007年夏)
- Khatibi, Abdelkebir, *Le Roman maghrébin*, Rabat: Société marocaine des éditeurs réunis, 1979
- Lahiri, Jhumpa, *The Namesake*, Boston: Houghton Mifflin, 2003 (ジュンパ・ラヒリ『その名にちなんで』 小川高義, 新潮社, 2004年)
- Le Goffic, Pierre, « Présentation », in Le Goffic ed., *Le Présent en français*, Cahiers Chronos 7, Amsterdam/New York: Rodopi, 2001, pp.i-vi
- Lenzini, José, *Mouloud Feraoun, un écrivain engagé*, Arles/Paris: Actes Sud, 2013
- Mathieu-Job, Martine, *Le Fils du pauvre de Mouloud Feraoun, ou la fabrique d'un classique*, Paris: L'Harmattan, 2007
- Michelet, Jules, *Ma jeunesse*, Paris: Calmann Lévy, 1884
- Natsume, Soseki, *I am a cat*, translated by Aiko Ito, Tokyo: Tuttle Publishing, 2001
- , *Sanshiro*, translated by Jay Rubin, Cambridge: Penguin Classics, 2010
- Sten, Hoger, *Les Temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Copenhagen: E. Munksgaard, 1952
- Tamir, Zakariyya, *Al-Qunfudh*, Beirut : Riyad al-Rayyi, 2005 (arabic)
- Yevseyev, Vyacheslav, *Ikonizität und Taxis: Ein Beitrag zur Natürlichkeitstheorie am Beispiel des Deutschen und Russischen*, Frankfurt: Peter Lang, 2002
- , "Measuring Narrativity in Literary Texts", in Jan Christoph Meister ed., *Narratology beyond Literary Criticism: Mediality, Disciplinarity*, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2005, pp.109-124
- Zeisler, Bettina, *Relative Tense and Aspectual Values in Tibetan Languages, A Comparative Study*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 2004
- 青柳悦子「日・英・仏語における物語言語ルールの比較」, 『比較文学研究』(筑波大学第二学群比較文化学類)第2号, 2006年, pp.1-12
- 「日本近代小説の成立と語りの遠近術——「地の文」における「タ型」と「ル型」の交替システム」, 『文藝言語研究 文藝編』(筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻)第55号, 2009年, pp.184-230
- 「ムールード・フェラウン『貧者の息子』にみる間主体性——テキストの反語性と新たな人間観の提示」, 『文藝言語研究 文藝編』(筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻)第61号, 2012年, pp.1-65
- 「フェラウン『記念日』論——〈自己更新〉の文学として」, 『文藝言語研究 文藝編』(筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻)第63号, 2013年, pp.1-62
- 「ムルド・フェラウン, 歪められた作家像の再検討のために——E・ロブレスとの関係を中心に」, 松田幸子・笹山敬輔・姚紅(編)『異文化理解とパフォーマンス』春風社, 2016年, pp.323-348
- 「1938-1939年のカビリー報道——カビリー人作家フェラウンの出発点として」, 『文学研究論集』(筑波大学比較・理論文学会)第35号, [2017年] 近刊

- 阿部宏「疑似主体に基づく主観性について——自由話法の仏日対照を中心に」、川口順二編『フランス語学の最前線3 特集：モダリティ』、ひつじ書房、2015年、pp.329-357
- イーター、ヴォルフガング『行為としての読書——美的作用の理論』響田収訳、岩波書店、1982年
- 石浜裕子「獲得した言語で書くこと——ムールード・フェラウン『貧者の息子』の一読解」(一橋大学大学院言語社会研究科提出博士論文)、2015年
- 茨木博史「フールール・メンラドの彷徨——ムールード・フェラウン『貧者の息子』の語りが孕む問題」、『Résonances』(東京大学教養学部フランス語部会)第3号、2005年、pp.32-40
- 小熊和郎「フランス語現在形と不定性」、春木仁孝・東郷雄二編『フランス語学の最前線2 特集：時制』ひつじ書房、2014年、pp.249-294
- 小田淳「不定代名詞onによる行為主体の希薄化について」、東郷雄二・春木仁孝編『フランス語学の最前線4 特集：談話、テキスト、会話』ひつじ書房、2016年、pp.1-46
- 岸彩子「情報の部分性と全体性——実況中継に用いられる現在形を巡って」、春木仁孝・東郷雄二編『フランス語学の最前線2 特集：時制』ひつじ書房、2014年、pp.215-248
- 田口紀子「フランス語人称代名詞の転用」、『仏文研究』(京都大学フランス語学フランス文学研究会)第21号、1992年、pp.1-10
- 田原いずみ「語りの現在形についての考察」、『明學佛文論叢』(明治学院大学文学会)第45号、2012年、pp.9-83
- 西村淳子『フランス語時制論——発話行為のテキスト言語学』春風社、2015年
- 橋本陽介『物語における時間と話法の比較詩学——日本語と中国語からのナラトロジー』水声社、2014年
- 藤川隆男(編)『白人とは何か?——ホワイトネス・スタディーズ入門』、刀水書房、2005年
- 柳谷あゆみ『現代シリアの短編小説 ザカリーヤ・ターミル著「酸っぱいブドウ」(ヒスリム)』、『Occasional papers』(上智大学アジア文化研究所)第19号、2016年、(全頁)